
奇人変人行進曲！

気まぐれサンタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奇人変人行進曲！

【Nコード】

N6628B

【作者名】

気まぐれサンタ

【あらすじ】

変人な天使に出会った高校生と彼らを取り巻く変人たちの話です。

第1話「ちわ〜。ピザの宅配にきました〜」

それは俺が学校から帰って、自室でくつろいでいる時に起きた、俺の今後の人生を大きく左右するような事件と言っても過言ではないようになって自分で言っていてよく分からなくなってきた。とにかくそれは、俺が自室でくつろいでいる時に起きたんですわ。

コンコン。

ドアがノックされたが俺はさり気無視を決め込んだ。なぜかって、俺の部屋をノックする人間はうちの家族以外にはいないからだ。つまり、うちの家族はさり気無視したくなるような個性派だっただことだ。

まあ、悪く言えば変人だけど家族を悪く言うのもなんだしな。つてもう遅いか。まあ、ここで隠しても話が進んでけばいずればバレルことだしな。

コンコン。コンコン。

「ちわ〜。ピザの宅配にきました〜」

2度目のノックの後に聞き覚えのない声がドアの向こうから響いてきた。つーか誰もピザなんか頼んでねーし、明らかな不法侵入だな。あ、そーいや、今うちには俺しかいなかったんだっけな。

うん。うちの家族は変人ってぶっちゃけはまだいらなかったな。つーかこの場合はドアの向こう側にいる不法侵入者の方が問題か。

「こんちわ〜。ピザの宅配にきました〜」

しれっとまだ言ってるよ。勝手に他人の家にあがり込んでる時点で宅配じゃねーだろ。つーか、相手に聞かれた瞬間バレる嘘って、どんだけ嘘が下手な奴だよ。それともこれはボケってことなのか？

「こんちわ〜。ピザの宅配にきました〜」

あれか。ツッコまれるまで一生ボケますってノリか。

「こんちわ〜。ピザの宅配に」

「誰も頼んでませんが、間違いじゃないですか。つーか、警察に通報していいですか」

「困ります」

即答かよ。つーか、困りますって。確かにそうだろうけど、んなこと逆ギレ気味に返されたって。なんか、俺のツッコみがだめだめみたいな空気になってんじゃん。

「いや、誰もピザなんて頼んでまへんがな!」

みたいな期待してたわけ？ だとしたら、ますますもって向こう側の意図が分からねえよ。少なくとも、警察って言葉ちらかさされてとんずらしないってことは泥棒じゃないってことか。まあ、泥棒の方がよっぽど。

「ちわ〜。ピザの宅配にきました〜」

やり直し要求!?

「って、ふざけんなくらあ！ 人が下手に出てりゃつけあがりやがって！ マジで警察呼ぶぞくらあ!!」

「だから、困ります」

はい。上手に出ても駄目でした。

「こんちわ〜。ピザの宅配にきました〜」

そして、再度のやり直し要求。もう、お手上げだ。ここまでマイペース、もとい自分勝手な奴は俺の16年の人生を振り返ってみても1人も見当たらねえよ（身内を除いて）。ちなみに声色からして相手は女の子らしいな。

つーわけで、俺は仕方なくアホらしいとは思いつつもベタなツッコみを試みた。

「いや、誰もピザなんて頼んでまへんがな!」

「ええ！ ここって、マイケルさんのお宅じゃないんですか!」

まだ続くのかよ……。つーか、マイケルってなんだよ。どう間違ったら佐々木って表札してある家にマイケルさんの注文したピザを届け違っんだよ。

「うちは佐々木ですけど」

「ええ！　ここってマイケルさんの家じゃないんですか！」

いちいちツッコめってわけか。こうなったらもうヤケクソだな。

「なんでマイケルやねん！」

「えーと、ノリかな」

普通に返すのかよ！　ってか、ただのノリ！

「ってわけで、あきちゃったから早いとここを開けてください」

「ふざけんな、バカヤロウ」

「？　なに怒ってんの？」

「自分の胸に聞け」

「なによう。開けないと君の個人情報暴露しちゃうよ？」

「は？　お前が俺のなに知ってるってんだよ」

「佐々木広之（ササキヒロユキ）、16歳、現在高校1年生。11月3日生まれ（ウメノ）のサンリ座。血液型はA型」

「……………」

……………当たってやがる。

「まだ開けてくれない？」

「く……」

不法侵入&わけの分からんボケ&俺の個人情報入手しちゃってる
ってくれば、あれか。情緒不安定なストーカーとかそういう系か。
なんにしる関わり合いたくね。

「ちなみに君が密かに想いを寄せてる女の子は、一月前入学式で見
かけて一目惚れした名前は」

「ちよつと待てえええええ!!!」

ベッドの上に寝つ転がっていた俺は、そりゃあ勢いよく飛び起き
てドアを速攻開けてやりました。そして、言っただけでやりましたよ。

「勝手に人の心のアイドル暴露しようとするなあああ!!! つー
か、なんで知ってたんの! なんて入学式で一目惚れしたってとこま
で知ってたの! 俺誰にも言っただけぞ!!!」

思いつきりツッコんだ後に俺の目に飛び込んできたのは……。

「……」

「あはは。初めまして」

おたくを被った不審度1000%の変態だった。

俺は絶句した。

第2話「殴り殺されるか、絞め殺されるか、消滅するか……どれがいい？」

「っーか、まああれです。いくら不法侵入つつつても、わけ分からんボケかますつつつても、俺のストーカーかもしれないつつつても、ドアの向こうから聞こえてくる声は女の子の声なんですよ。男なら誰だって少しは期待しますよね？ 状況はまあ置いといて、心の隅っこじゃ、どんな女の子かな〜なんて、ちょっとわくわくしますよね？ それこそ男のロマンってやつで。」

しかし、ドアを挟んだ向こうの世界に立っていたのは、おたふく面を被っていたかにもな変態だったわけで。

男のロマンはズタズタに引き裂かれたわけで。

この変態に俺は心のアイドルまで知られちゃってるわけで。

そんな俺は絶句した後に、なんのリアクションもとらずにドアを閉じて、カギをかけたわけで。

「いやああー！ ノーリアクションはいやー！ なんらかのリアクションとってー！」

そこで、変態がドアの向こうで泣きながらドアを叩いているわけ。

「……………」

「おーねーがーいー！ 私をただの変態で終わらせないでえー！」

んなこと訴えられても、こっちは関わり合いになりたくないわけ。

「つか、このままこいつ警察に引き渡しちまえば物語はめでたしめでたしであっさり幕を引くわけ。

「こっとなったら、あんたの心のアイドル暴露してやるー！ 朝礼で校長の挨拶の後に全校生徒の前で暴露してやるー！ 1年A組の佐々木広之の心のアイドルは」

「早まるなああああ！」

反射的に俺はドアのカギを開け、変態を部屋に入れてしまったわけ。

「っていつか、そのどっかで聞いたことのある説明口調いつまで続けるの？」

俺は変態を部屋に引っ張り入れると、勢いよく部屋のドアを閉めた。

「あ、元に戻った」

「お、お前……！」

「ん？」

「なんで俺の名前から心のアイドルまで知ってんだよおお！ つか心のアイドルなんて言い方したら俺の人格疑われんだろうがあああー！」

「じ、こいつ……！」

俺はおたふく面を被りつつ、俺を指さしながら笑う変態を思いつきりにらみつけた。

おたふく面のほのぼの笑い顔でそんなことされた日にゃ、いくら温厚な俺だってそりゃキレますわ。

ちなみにおたふく面は丸顔で、額が高く、頬がふくれ、鼻の低い女の仮面ね（電子辞書調べ）。

「てめえ！ 人をバカにするのも大概にしろ！」

俺はそう怒鳴りつつ、おたふく面被った変態の肩をつかんだ。

「あ、そんなことしたら」

刹那、おたふく面を被った 面倒くさいからもう変態でいいやの耳についたピアスが激しく発光した。かと思うと、ボディビルダー並の筋肉隆々な大男が俺の目の前に文字通り「ヌ」と現れた。

……ふんどし一丁の。

はい。俺はまたもや絶句しました。ツッコむ箇所がありすぎて、言葉になりません。ちなみに、補足すると変態2（目の前に現れた大男のことね）は2メートルを越える大男であり、身長175センチの俺をものすごい見下ろしてます。つーか、いつ襲われてもおかしくないぐらい敵意むき出しの形相でにらまれています。つーか、肌がなんか異様に赤黒いんですけど。気のせいか切り傷やら刺し傷と思われる傷跡が体のいたるところに刻まれてるんですけど。

「……小僧」

変態2は、今まで数え切れないほどの人を殺してきました、みたいな目で俺をにらんだまま静かに声をかけてきた。

「は、はい？」

「殴り殺されるか、絞め殺されるか、消滅するか……どれがいい？」

いやいやいやいや。どれ選んでも結果は同じじゃん。つーか、最後の明らかなにかおかしいだろ。

「……そうか。消滅がいいか」

ええ！俺なんも言っていないのに！？

「質問に5秒以内に答えない者は消滅させる。それが俺の流儀だ」

なんつー迷惑な流儀してんだよ！んな流儀に付き合ってたら

「なあ、この問2の答えってどうなの？」

「ちょっと待って。まだ問1終わってないから」

「あ、うん」

「えーと……。問2は」

「あ、5秒経っちゃった。ごめん。消滅させるね？」

てなあり得ないことになっちまうだろうが！

とか、思ってる内に変態2の右手がみるみる炎に包まれてるよ。握った拳に炎が収束されてるよ。部屋の温度が一気に40度跳ね上がっちゃったよ。

って、あんた炎操れんの!?

「ちよつと待つて。イフリート」

「……なんスか？」

イフリート？ 今、イフリートって言った？ つーか、いい年した(多分)おっさんがおたふく面被った女の子(変態)に微妙に敬語遣ってるよ。

「その人消滅させちや駄目だよ。私今日からこの家に居候させてもらうんだから」

「いや、でもコイツあんたに危害加えようとしたっスよ。契約通り消滅させないと」

「ダメ。分かったらさっさと消えて。暑苦しいでしょ」

うん。いろんな意味でな。

「ち……」

変態2、もといイフリートは忌々しそくに舌打ちした後大人しく

変態のピアスに戻っていった。話しの流れから、変態に危害を加えようとする輩を全て消滅させるようになってるみたいだけど、服従してるわけじゃないみたいだな。敬語微妙だったし、舌打ちしたし。まあ、今はそのことは置いていいか。それより今はあれだ。あえてスルーしたコイツの爆弾発言。ツッコみたくなーけど、そこんとこツッコんでみよーか。

「えーと、とりあえず助かったよ。ありがとう」

「どういたしましてー」

「で、さっきのポケなんだけど俺はどうツッコめばいいですか」

「えー？ 私ポケたっけ？」

「うん。この家に居候するってポケてたっしょ？」

俺はにっこり笑って言うてやりました。

「あはは。あれは別にポケたわけじゃない」

「させるか、ポケエエエエー！！」

「佐々木広之君のー心のアイドルはー同じクラスの」

「好きにしゃがれ、コンチキショーー！！」

たち悪いよ、コイツ……。

第3話「こいつ、世の中なめきってんな」

俺は今、自室で変態と向かい合ってます。とりあえず変態を勉強
机の備え付けの椅子に座らせ、俺はベッドの上に座ってます。

「あのー、ずっと気になってたんだけど、私のこと変態って言うの
やめてもらえない？」

いや、1度も口にだしてねえよ。人のナレーションにいちいちリ
アクションすんな。

「はい。でも、変態は止めて。おかめちゃんって呼んでー」

だから、人のナレーションにリアクションすんな。つーか、どっ
ちにしろ大差ねえよおかめちゃん。

「あはは。おかーめ、かめかめ」

「楽しそうだな、おかめちゃん」

「そういうあんたもね」

いや、楽しくねえ。全っ然楽しくねえよ。

「……てめえの目は節穴か？」

「私の目はプラチナよ？」

こんのおたふく面（今だけめんとかいてづらと読む）が……！！

しかし、ここでキレるわけにはいきません。なぜだか分からない方は第2話を見て下さい。えー、面倒くせえよって方のために説明すると、コイツに危害を加えようもんなら、コイツのつけてるピアスからイフリートが出てくるんです。そりゃもう「殴り殺されるか、絞め殺されるか、消滅するか」の3択を迫られます。ちなみに、質問に5秒以内に答えなければ消滅させられます。「流儀」だそうです。

んで、このイフリートは多分火を自在に操る、言わずと知れた魔神だと思います。だって、火操ってたし。つーか、コイツに聞くのが1番てっとり早いかな。

「なあ、おかめちゃん。さっきそのピアスから出てきたイフリートって、もしかして火を自在に操れることで知られてる魔神なのか？」

「うん。そうだよ」

はい。そうだそうです。なぜイフリートがピアスから？ 壺じゃねーの？ つーツツコみは機会があったらそのうちしようと思いません。

え？ 今？ しませんよ。なんでって、そんなツツコんだこと聞くほどコイツと親しくなる気ないし。

「ねえねえ、さっきから誰と話してんの？」

「いや、だからナレーションにいちいちリアクションすんな！ ややこしくなるから！」

「はい」

「まったく……」

よし。気を取り直して本題に入るか。

つてことで俺は椅子に座りながら、無遠慮に他人の部屋の中をキョロキョロ見回しているおかめちゃんに声をかけた。

「なあ、おかめちゃん」

「んー？」

「俺んちに居候するにあたって（あくまで内定）いろいろと聞いときたいことがあるんだけどいいか？」

「え？ いろいろって、スリーサイズ……とか？」

「んなもん誰も興味ねえええええ！！」

「あはは。だよーねー。興味あるのは、心のアイドルちゃんだけだもんね」

「う、うるせえよ……」

つて、なに照れてんだ俺！ アホか！

「はい。アホです」

「やかましいわ、ボケ！」

「そんな、ボケって……ポッ」

「なに照れてんだよおおおー!! ボケってのはけなし文句じゃボケエエエー!!」

「……ポッ」

……マジで殺してやりてえ。

まあ、イフリートに勝てなきゃそれは不可能だけどな……。

「どうしたの? 元気ないねー、ヒロ君」

「うるせえよ」

全部てめえのせいだったの。っーか、ちゃっかり「ヒロ君」なんて親しげなニックネームで呼びやがって。まあ、ツッコむだけ疲れるだけだからスルーするけどもさ。

「……とにかく!」

俺はまたまた気を取り直して、そう声を出した。

「俺の質問に順番に簡潔にボケとか一切入れないで答える。いいな?」

「はい、はい」

「クエスチョンQ」

- 1、お前何者だ？
- 2、なぜに居候？
- 3、なぜに俺んち？
- 4、俺の個人情報どうやって入手した？」

「アンサー
A

- 1、おかめちゃん。
- 2、天界から出てきたはいいけど住むところなくてー。
- 3、どこいつても警察呼ばれてー。
- 4、ひ・み・つ

分かりやすくまとめると……。

Q 1、 お前何者だ？

A 1、 おかめちゃん。

Q 2、 なぜに居候？

A 2、 天界から出てきたはいいけど住むところがなくて。

Q 3、 なぜに俺んち？

A 3、 どこいつても警察呼ばれて。

Q 4、 俺の個人情報どうやって入手した？

A 4、 な・い・しょ

「……なるほどな」

質問を終え一息つく俺。

「って、ポケんなつつつたのに出鼻からポケてんじゃねえええええええ！

「！」

「…………ポ」

「そりゃもうええつちゆうんじゃあああ！！」

「あ、ヒロ君？ そんなことしたら……………」

うつかり、勢い余っておかめちゃんの肩につかみかかっちゃった俺。

「あ……………」

しばらくお待ちください

「あはは」

「いや、笑い事じゃねえだろ！」

あのおっさん、今度は出てくると同時に俺を殺そうとしました。質問も問答もなしに、目があった瞬間ヒートナックルを俺の顔面めがけてねじ込んできました。

反射的に紙一重でかわしたのに（今だけ姉に感謝 深く考えず読み流してください）、頬がまだ熱いです。ちなみに2撃目を加えられる前におかめちゃんが助けてくれました。どうやら、あのおっさんおかめちゃんに逆らえないみたいです。

そこんこの詳細はまた今度ね。

「と、とにかく！ これ以上は俺の体が持たねえから……！」

俺は哀願しました。そりゃもう、哀願しました。

おたふく面被った女の子に。

「ヒロ君って、ツッコみに命かけてるんだね」

「いや、そこまでの覚悟ないから……。ってか、もうお前何者だよ。このままなあなのノリで答えてくれ」

「うん。私はねー天使だよ」

「は？ てん……？」

「しー。て・ん・し。天覧武道会の天に、使用料6万5020円の使で、天使だよ」

「……」

俺にどこからツッコめってんだよ……。

あ、なんか頭痛くなってきた。

「？ どうしたのヒロ君。急に頭抱えたりして？」

「これが、おたふく面被った女の子に自分のこと天使だって言い出された時取る正しいリアクションなんだよ」

「ふーん。変なの」

……お前にだけは言われたくねえよ。

「で、お前が天使だって証拠はなんかあんのか？」

俺は気を取り直して声を出した。

「えー、もしかしてヒロ君、疑ってる？」

「いや、もしかすんな。私天使ですっつってあっさり信じてもらえるほど世の中は甘くねーんだよ」

「私、辛いのが苦手なんだよね」

こいつ、世の中なめきってんな。

「とりあえず、自分が天使ですっつていう証拠なんか提示しろ。できなきゃ、虚言壁のある不法侵入者として警察に突き出すからな」

「えー、めんどくさー」

おかめちゃん椅子を前後に揺すりながら不平をいっています。完全に居候させてもらおうって奴の態度じゃねえな。完

「よし。なら早速110番」

「いやあー！ それだけはいやー！ー！」

「うおおー！ー！」

携帯片手に110番しかけたところで、なんかおかめちゃんかすごい勢いで俺にすがりついてきました。

「警察はいやー！ ポケてもポケても「ふざけるな！」の一点張りで私の心はズタズタにいー！」

「……」

なんか深く語らなくても、ここにたどりつくまでのこいつの苦勞が目に見えるな。まあ、世の中「こんちは」。ピザの宅配にきまして「なんつって部屋のドアをノックする不法侵入者に「いや、誰も頼んでまへんがな！」なんてツッコんでくれる人間なんて、そうはいないわな。そのうえ、おたふく面なんて被ってりや、まあ、完璧アウトだわ。

今までのこいつのポケ倒しはこれまでの反動ってわけか（定かではないが）。なんか、ちょっと同情しちまうな……。

「殺してー！ いっそ人思いに殺してー！ おーいおいおい……」

「分ーかった。分かったから。その泣き方やめろ。まだ警察呼ばねーから。離れる。離れろってー！」

「ありがとうございます、御代官様」

「普通にありがとうございますのかおのれは」

つーか、おたふく面被った女の子に泣きながらすがりつかれるな

んてこと、今後の俺の人生にゃ一度も起こらねーだろうな。

……どうでもいいけど。

「で、お前が天使だって証明できるもんなんかあるか？」

「あ、うん。ある、ある〜」

そう言いつつ、おかめちゃんは両耳につけたピアスを外した。

ハート型のリングのあしらわれた、それはそれはかわいらしいピアスです。この中にニメートルを超える大男が宿ってます。

んで、おかめちゃんはおもむろにピアスを俺に渡した。

「なんだよ？」

「つけてみて？」

おいおい。こんなかわいらしくてぶっそうなもんを俺につけてるか？

あ、ちなみに俺両耳にピアス穴あけてます。はい。校則違反ですが、一応今はヤンキーってわけじゃありません。

「まあ、つけるのはいいけど、それとお前が天使である証拠となんのつながりがあんだ？」

「そのピアスはね、天使しか装備できないものなの」

いや、装備って。ただのアクセサリだろ。

「人間がもし間違っつて身につけようものなら、地獄の業火がたちどころに全身を焼き尽くして消しズミに」

「おいしいいいいい!!」

俺は耳の穴に通しかけてたピアスを思いっきり床に投げつけました。はい。全力で。

「殺す気かおのれはああああ!!」

「えー。だって、証拠見せろって言ったじゃん」

「だからってんな危険なことやらすんじゃないやねえ！ ボケのはんちゅう明らかに越えてんだろが！」

「ツッコみは辛いね」

「そう思っつなら自^く粛^ししろおお!!」

ちなみにこの後、おかめちゃんは「自動車の運転免許証」を差し出し、そこにはなぜか職業の欄があり、そこに「天使」という文字が記されていましたとさ。

「つか、自動車の運転免許って。お前何歳だ？ 職業天使ってなんだよ。とは思いながらも、もう、これ以上ツッコめねえから……。その辺はまた今度ね……。」

「ってわけで、めでたし、めでたし」

「って、勝手にオチつけてんじゃねえええ!!」

第4話「いや、呼ぶなら普通ミリーとかだろ！」

なんつーか、俺の抱いてる天使像ってのは、白での薄い生地のパ
ンピースを身につけた、背中からは純白の羽を生やした、世に言う
「天使のような」と形容されるまさに見るだけでうっとりするよう
な笑顔の持ち主で、まさに身につけたワンピースのような純白な心
の持ち主で。

とにかく、なにが言いたいかというと、俺の目の前にいる天使は
俺の抱いてた（もう過去の話です）天使像にかすりもしてないって
ことですわ。

まず、服装。半袖の白Tシャツにジーンズです。

純白の羽。生えてません。

笑顔。おたふく面です。

心。違う意味で真っ白です。

そんで、その天使は人の部屋のテレビを勝手につけてドラマの再
放送を見てます。

夕方のこの時間にお笑い番組はしてないことを指摘するとブーブ
ー文句たれてやがりましたが、結局大人しくドラマ見てます。

「啓介のバカー！」

あ、大人しかつたの見初めの三分だけだったな。

「なんでプリンなのよー！ 女が甘いもの食べたいって言ったら、こしあんのおんパンに決まってるでしょー！」

ちなみに啓介ってのはドラマの主人公ね。

「ほらー！ プリンなんか買ってくるから、恵出てっっちゃうのよー！」

コイツの文句だけ聞いてたら分かんないでしょうけど、このドラマ純愛の恋愛ドラマです。んで、もちろん恵ヒロインが出てったのは啓介がプリン買ってきたせいじゃありません。つーか、このシーンは恵が啓介に「なんだか急に甘いもの食べなくなっちゃった」と言いだし、啓介が恵のためにコンビニに甘いものを買いに言ったすきに姿を消してしまうというシーンです。

詳しく説明すると長くなるんで省きますが、恵は啓介の事を想い、自分の気持ちを押し殺し出ていったわけです。一般の人はこのシーンで涙します。

「啓介のバカー！」

恵の残した書き置きを見て泣いている啓介を天使がまたバカ呼ばわりしてます。つーか、啓介がプリン買ってきたからって恵には分かんねーだろ。

啓介へ。

あ、書き置きが恵の声で読まれ。

ひそかにあなたの後をつけてました。あなたがなにを買って来るのか知れたかったから……。啓介？ 私信じてたんだよ？ あなたはきつとこしあんのおんパンを買ってきてくれるって。でも、あなたはこしあんのおんパンには目もくれずプリンの方に……。さようなら、啓介。どうか幸せになってください。

恵

うん。最後の2行だけは改ざんされずにすんだな。

「ねえねえ、ヒロ君」

たった10分でドラマに飽きた天使が俺に声をかけてきた。

「なんだ？」

「なんか甘いもの買ってきて」

「プリンでいいか？」

「んもう。女が甘いもの買ってきてって言ったら、どら焼きに決まってるでしょ？」

「そうか。とりあえず啓介と恵に謝っとけ。つーか、ドラマの脚本家に土下座しろ」

「あはは」

天然かボケかまだ図りかねるな……。

「んーどんなとこつて普通だよ？ 天使がいたり悪魔がいたり、死神がいたり、鬼がいたり、妖怪がいたり」

「明らかに普通じゃねえな？」

「つーか、怖ーよ。天使以外全部ブラックな生き物じゃねーか。

「基本的な世界観はほとんどこつちと同じだよ？」

「つまり普通に、天使やら悪魔やら死神やら鬼やら妖怪やらが街を歩いてる感じか？」

「うん。そうそう」

「さいですか……。」

「ところで、お前はなんで天界から出てきたんだ？」

俺は素朴な疑問を口にした。

「それは、親と喧嘩し 見聞を広めるためにね」

「親子ゲンカして、家出してきたってわけか？」

「あはは」

「笑ってごまかせると思うなよ？」

「しくしくしく……」

「泣いても駄目だ！ てめえの親子ゲンカに他人である俺を巻き込むんじゃねえ！ 今すぐこっから」

「こっころの〜アイドル〜ルル〜」

出てけとは言えませんでした……。

つーか、またこんなオチかよ……。

あ、ちなみに自動車の運転免許証に天使の素顔の写真載ってました。

肩まで伸ばした白銀色の髪にプラチナの瞳以外はどこにでもいそうな普通にかわいい女の子でした（ちなみに俺と同一年らしい）。

つーか、普通にこっち見て黙って微笑んでりゃまともに見えんのもってーねーなーって感じですよ。

それで、本名はミリアリア・バレンタインらしいです。

「バレちゃんって呼んでね」

いや、呼ぶなら普通ミリーとかだろ！

ってことで次回に続きます。

第5話「キャラ変わってんじゃねえか！」

さて。天使が俺の家に居候するに当たって大きな問題が一つある。それは、うちの家族が天使の居候を認めるかどうかだ。

わけ分からんアホ（例えばおたふく面被った天使とか）が唐突にうちに居座ることになる場合、主人公は一人暮らし。両親は海外出張、もしくはすでにこの世にいないってのがセオリー（独断と偏見）だが、あいにくとうちは一軒家に家族四人で住んでんだな（ちなみに家族構成は父、母、姉、俺ね）。

つーわけで、天使がうちに居候するには親父とお袋と姉貴の承諾が必要なわけですな。

つまり、俺にもまだ希望が残ってるわけです。うまくいけば、このプライバシー侵害ヤロウを追い出すことができるかもしれないわけです。

今まで、こんだけうちの家族に期待を持ったことはありません。今だけは家族がいてよかったと思えます。

つーことで、人のベッドの上に寝そべってマンガを読みふけている天使に、早速その旨を伝えたところ。

「大丈夫だよ。普通の人に私の姿は見えないから」

打ち砕かれました。夢も希望もなにもかも。

「ってちよっと待て。その原理からいくとお前と普通に会話してる

俺は普通じゃないってことか？」

「だね」

いや、軽くショックなんだけど……。

「大丈夫だよ、ヒロ君。普通じゃないっていても変人ってだけだよ」

「ありがとよ、チクシヨ」

ん？ ちょっと待て？

「ちょっと聞いていいか？」

「んー？」

「今の話の流れだと（俺的には不本意だが）変人にはお前の姿は見えるわけか？」

「うん。あらゆる要素の中の一つだけでも常人より五倍突出してたら私にお目通りがかなうのよ」

「いや、なんだその基準。つーか、できればお目通りかないたくねーよ。」

「ちなみにヒロ君はツツ」み部門担当、変人率32%ね」

「……なんだそりゃ」

「あ、今ツッコまなかったから変人率31.7%に下がったよ?」

「いや、いちいち変動すんのかよ」

「うん。0%になったら私のこと見えなくなるから気をつけてね」

「……………」

「つか、そっちの方が手っとり早くこいつから解放されんじゃねえか? うん。そうだよ。今後一切こいつにツッコまなけりゃ。」

「ちなみに0%になったら、イフリートと強制タイムンデスマッチのイベントが発生」

「待てええええええ!」

「あはは。なんちゃって」

「……………」

「今のでヒロ君の変人率が526%に」

「いや、おかしいだろ! 減り方と増え方釣り合ってるねえじゃねえか!」

「なんちゃって」

「やっつろお……………」

「あはは。駄目だよヒロ君。ツッコみがないとこの話成り立たな

いよ？」

「……」

お願いだから誰か替わって……。

「ルンルンルン」

んで、この天使散々無駄に人にツッコませといてご機嫌でまたマンガ読みだしました。

つーか、変人率なんてのほんとに存在すんのか？

どうしても気になるんで（俺の変人率ってほんとに30パー越えてんの？）とりあえず聞いてみるか。

「なあ、天使」

「……ポ」

「あ？」

なんか、声かけたら俺の顔見てすぐ顔を伏せましたこいつ。なんか照れてるみたいだな（おたふく面被っててよく分かんねーけど）

「なんだよ？」

「そんな、いくら私が天使のようにかわいいからって、天使って……」

「いや、てめえの種族の名称呼んだだけだろ。俺たちからすりゃ人間って呼ばれるようなもんで、そんなもんで照れる奴なんか恐らく一人もいねえぞ」

つーかおたふく面被ってんだから、かわいいもくそもねえよ。

「今のでヒロ君の変人率525.5%に下がっちゃったよ？」

「いや、ちよつと待て！526%ってほんとだったのかよ！」

「ヒロ君は変人率をちらつかせば無条件で食いつく……と」

く……。

こいつなんかジーンズからメモ帳と鉛筆取り出して、メモしました。いちいち内容声に出しながらメモしました。

「なに書き込んでんだ？」

「な・い・しよ」

「になつてねーよ」

つーか、小道具持参とは芸細かいな。

「あはは。実はこれにヒロ君の個人情報みんな書き込んでんだ」

はい。ただの小道具じゃありませんでした。

「全部って、名前から心のアイドルまでか？」

んで、五秒経過……。

イフリートは右拳にあっつあつの炎をまとわせました。

そして、ヒートナツクルを俺の顔面めがけて。

「この前はよくも俺の出番をカットしてくれたなああああ……！」

「ええええ！」

それで怒ってたの！ つーかそれ俺のせいじゃねえよ！

「あやかましやあああ……！」

「って、あんたも人のナレーションにリアクションしてんじゃねえよ……！」

俺は命からがらイフリートのヒートナツクルをかわしつつ、しっかりとツツコんでやりました。

「あんなもん関係あるかああ！ んなあにいがあしばあらくお待ちあちくだあ！ カンカンカンカカン！ さいじゃボケエエエエ！」

「いや、なんだよその中途半端な歌舞伎口調！ キャラ変わってんじゃねえか！」

「あそれえをお知られたからにやああ！ カカン！ あ生かしちゃあおけねえ！」

とか言いながらイフリートは床にしりもちをついてる俺の頭上に

ヒートナックルを打ち下ろした。

「うっぎゃあああああ！！」

果たして俺の運命は！！

次回に続く！

第6話「痛快！ 地獄の苦しみに耐える変態（おとこ）って見苦しいね」

一つ確認しておく、イフリートのパンチはものすごい速いです。その辺のボディビルダーの筋肉が魅せるためにあるなら、このおっさんの筋肉は間違いなく人を殺すためにあります。普通の人間なら、とてもこのおっさんのヒートナックルかわせません。

かくいう俺もイフリートの拳など一度かわすのが精一杯なわけで、おまけにキレてますますスピードの増した拳を「キヤラ変わってんじゃねえか！」とツッコみつつもう一度かわすなど不可能なわけで。

とりあえず、俺は死を覚悟しました。

っつっつっ。

「うっぎゃあああ！！」

「そこまでよ、イフリート！」

イフリートの拳が俺の脳天を打ち抜く前に、絶妙のタイミングで天使がストップかけました。しかし。

「あやかましやあ！」

止まりません。今のイフリートは主の命令でも止まりません。つか、お前出番カットされたのそんなにムカついてたのか？ むしろ、お前からしたらあのシーンはカットされた方がよくないか？

そんなことを思いながら顔を上げたら、しゃれにならない熱を帯

びた拳が俺の眼前に迫ってました。

と思ったら、いきなり拳が止まって引っ込みました。

「つつぎゃああああおあいあぎゃあああ……!」

そして、聞くに耐えない奇声を上げながらイフリートが地面をのたうち回っています。

……両手で大事な部分押さえながら。

はい。説明するとイフリートが唯一身につけているふんどしは、ただのふんどしじゃないんです。察しのいい方には説明するまでもないかもしれませんが、そのふんどし、主の命令に逆らうと強制的に締め付けるようにできてるらしいです。んで、その威力は……。

「ああああおおやぎゃびいいいやああ……!」

言うまでもないな……。

「あっはっはっはっはっは、ぎゃびだって、ぎゃびいー。あっはっはっはっはひー」

んで、天使は腹抱えて笑ってます。つーか。

「あやああやあいぐううううう……!」

イフリート、とうとう動かなくなっちゃったよ。そろそろ助けてやれよ。同じ男としていたたまれねえから。

ってことで、俺は笑いこけてる天使に言ってやった。

「おい。いい加減勘弁してやれよ。イフリートもう声も出なくなっ
てんぞ」

「あはは。そだね」

ってことで、動かなくなったイフリートは天使のピアスに戻され
ました。

ちなみに、前回カットされたシーンは、これとほぼ同じでした。
天使の制止を聞かなかったがために、大事な部分を押さえながら地
面をのたうち回ってました。

つーか、あいつもこうなるの分かってるはずなのになあ……。

そんなに自分の情けない姿を暴露して欲しかったのか？

「あー笑った笑ったー。ほんといつ見てもイフリートの「痛快！
地獄の苦しみに耐える変態おかしって見苦しいね」は面白いね」

「主人の命令無視するおっさんを使い続ける理由はそれか」

「実用的でしょ？」

「お前だけにな」

同情するぜ、おっさん……。

「それにしても、ヒロ君？」

「なんだ？」

「あれってそんなに苦しいの？」

「あー……苦しい」

「つか、こいつよく分かってねーんだな……」。

「ってわけでイフリートいじりが終わったところで、今回は終わりです。前回からひっぱっていいなんか、すいません。」

「今回は前回の冒頭でちらつかせた伏線通り俺の家族を紹介します（したくねーけど）。」

「つかわけで、次回に続く！」

第7話「あのおいくら？」

ただいまの時刻は夕方の6時過ぎ。天使は俺の部屋で漫画を読みながら、時々爆笑しつつ「バカ〜！」だの「ボケ〜！」だの「もうあんたの顔は見飽きたのよ！」だの　以下省略　とにかく喚きながら漫画にはまっています。

一方、俺の方は落ち着きなくさつきからずっと時間ばかりを気にしています。

なぜかって？

そろそろお袋が買い物から帰ってくる時間帯だからです。

話のしよっぱなに暴露した通り、うちの家族は変人です（親父と俺以外）。そして、天使にお目通りがかなうのも変人です。ってわけで、俺はさつきからずっと落ち着きません。今にも玄関からお袋の「ただいま〜」という間延びしたのんきな声が響いてきそうで気が気じゃありません。

じゃあ、家族連中にていよく天使が居候するのを断って欲しい俺がなぜお袋が帰ってくることに不安を感じているのかというと……。

うちのお袋なら、平気で天使の居候を承諾しちまいかねえからです。

それに、実の母親についてこんなことというのはなんだけど、正直うちの母親は変人の域を越えちゃってます。ずば抜けてキャラが濃いとこそういことじゃなくて、まあ、ぶっちゃけちまうと。

「ただいま」

はい。見計らったようなタイミングでお袋帰ってきました。

「ヒロ君？ 今の声誰？」

「これは死んでいったプリンたちの分よっ！」ってわけ分からんこと叫んでいた天使が漫画から顔を上げて、階下から響いてきた声にしっかり反応を示しました。

俺は仕方なくその質問に答えた。

「お袋だよ」

「え？ ヒロ君のお母さん？」

「そっだよ」

「やだ。どうしよう……」

「ってなに、初めて恋人の家に遊びに来てたら偶然親が帰ってきたみたいなリアクションしてんだよ！」

「っか、漫画読むためにおたふく面外してっから（ちなみにおたふく面は後頭部に装着してます）芸（？）がリアルになったな。」

「そうとなれば早速挨拶にいかなくちゃ」

「あ、おい……」

あーあ。注意点聞かずにいつちまった……。まあ、いいか。ってことで、俺は自室で傍観（見えないけど）することにした。

トットトットットットット（天使が階段を降りてく音）
……。

「あゝ全くゲンさんのセクハラにはほんと参るわ〜」

どうやら、お袋はお決まりのグチをこぼしながらキッチンに入っ
たようだな。んで、天使は　。

「こんにちは〜。ピザの宅配にきました〜」

やりやがったあのヤロウ！

「あら〜。ピザなんて誰も頼んでないのに……。あっそつか。きつ
とヒロ君がたのんだのね。全く、もうすぐ夕飯なのに困った子ね」

いや、まず勝手に家に上がり込んでるピザの宅配屋に疑問を抱け
よ。

「はい。おいくらですか?」

「え? あ、いや……。え?」

ツッコみで返されなかったもんで、逆に天使の方が戸惑ってるよ。
つか、二度目のえ? でどうやら気づいたな。

「……」

うん。おそろく声も出ないほど驚いてるな。

「あのおいくら？」

「ぎゃあああああ！　でたあああー！！」

ダダダダダダ（天使がキッチンから逃げ出してる音）……！

「？　あのおいくら？」

まだ言ってるよ。

んで。

トットントットントットントントントントントント（天使が階段を昇ってくる音）。

って余裕だな、おい！

「でたあああ！　ヒロ君、でたよおおお！！」

天使はものすごい勢いでドアを開けると、俺に思いっきり抱きついてきた。つーか、階段昇ってくる時のあの余裕のステップはなんだったんだ？

「お、女……人魂……宙に……！」

天使は涙ぐみながらなんとか言いたいことの一割ほどを言葉に換えられたようだ。つーか、不覚にも涙ぐんで肩震わせてる天使を少

しかわいいと思っちゃったよ、俺。

「ああ。分かった。分かったから、少し落ち着け」

俺は俺の胴体をつしりとつかんでる天使をなんとか引き離しつつ、天使をなだめにかかった。

「悪かったな。先に言っとくべきだった。実はうちのお袋」

「お、お、お……おばけがー！ おばけがドアをすり抜けてきて私のボケをスルーしたー！」

もしかして、ドアをすり抜けてのスルーとスルーかけてんのか？
つて、まあ、いいや。

はい。今天使が言ったとおり、うちのお袋は幽霊おぼけなわけですね。

「たたられるー！ 末代までたたられるー！ ひゅ〜どろどろどろ〜
〜おーいーくーらーでーすーかー？ つてえー！ こんなことなら
「あ、はい。1万とんで25円です。あ、小銭ありますか？ ないです
か。あ、大丈夫ですお釣りあるんで。つてあれ？ ピザがない！
つてやつとけばよかつたよー！」

「……」

とりあえず、怯え方に余裕があるな。

「落ち着け。とりあえずあれはそういつたちの悪いもんじゃ」

「ヒロ君？ こつちにピザ屋さん来なかった？」

俺は言葉を止めて、壁から顔だけをニユッと出しているお袋に目を向けた。

あーあ……。

ちなみに分かりやすく説明すると、部屋に沿った壁の外側に胴体、内側に生首です。

「ぎゃあああああー!!」

お袋の生首を目の当たりにして、絶叫する天使（無理ねえな）。

「あら〜ピザ屋さん。ここにいたの。おいくらですか？」

天使を見つけ、その言葉を発するお袋（決してボケじゃありません）。
ん）。

「ひ、ひいいいいい！ か、過去が！ 過去が私をどこまでも追いかけてくるー!!」

そう叫びながら天使は俺にしがみついてきた。つーかこいつ、ほんとに怯えてんのか？

「あら〜。あら、あら〜？ あなた達。フッフ……。そう。ヒロ君も隅に置けないわね〜」

うわ……。事態が更にややこしくなったよ。つーか、（天然）ボケ二人にツッコミみ一人で対処しろってか。

俺はピアスに手を当ててなにやら召喚っぽいアクションに入ろうとする天使を慌てて制止した。

「ヒ、ヒロ君？ 何で止めるの？」

「これでイフリートにまで乱入されたら收拾つかねえからだよ！
っーか、あれはれっきとした俺の母親だ！ 消滅さそうとすんじゃ
ねえ！」

「へ？ あ、あのお化けがヒロ君の母親？」

ようやく話を通じたところで俺は自分のお袋が幽霊であることを天使に説明した。んで、次に俺と天使が決してそういう仲ではないことをなんとかお袋に納得させ（したかどうかは怪しいが）、ようやく天使は「そうとなれば早速挨拶にいかなくちゃ」の台詞を実行に移した。

「あの一初めまして、ヒロ君ママ」

いや、ヒロ君ママ言うな。もっと他に呼び方あんだろが。

ちなみに、二人は今向かい合って正座してます。お袋は宙に浮きながら正座してるんで、どうしても天使はお袋を見上げる形になってます。

「初めまして。広之の母親の真希です。いつも広之がお世話になって
っー」

「ねーよ。っーか、今日初めて会ったばっかの奴だっつったろ」

「ヒロ君ったら、照れちゃって」

「照れてねえ!」

「ごめんなさいね。えーと……」

「あ、私ミリアリア・バレンタインです。バレちゃんって呼んでくださいな」

いや、俺の主張（真実）を聞け、バカヤロウ共。

「ごめんね、バレちゃん。この子ったら照れちゃって」

「あはは。ヒロ君照れてんの?」

「だから、照れてねえ!! 照れる要素なん」

「ところでバレちゃん?」

はい。あっさり却下されました。

「ほんとのところ、うちのヒロ君とはどういう関係?」

どうもこうもねえー! つう俺の魂の叫びは天然二人には届きませんでした……。んで……。

「人には言えないことまで知り尽くした関係です」

「そりゃ、てめえだけじゃボケエエエ!!」

「まあ〜。まあまあ〜」

「てめえも鵜呑みにすんじゃないやねえええ!!」

「バレちゃん〜。そのところ、下で詳しく聞かせてくれる?」

「あはは。いや」

んで、俺を部屋に残し二人は部屋を出ていった。

って……。

「俺を無視すんじゃないやねえええー!!」

第8話「すき焼きには生卵がつきものでしょ？」

ただいま、俺はダイニングキッチンのテーブルの前に腰を下ろしてます。んで、もちろん天使の奴も当然のように俺の向かいに腰を落ち着けてます。

はい。俺を散々シカトし、あまつさえ部屋に一人俺を置き去りにしやがったバカ共（後頭部におたふく面装着した天使&天然幽霊）は意気投合しすっかり仲良くなっちゃったわけです。もうお互いのことを「ヒロ君ママ」「バレちゃん」なんて呼び合うすっかりフレンドリーな間柄になっちゃったわけです。

もちろん、天使の居候も「あら〜、だったら好きなかだけうちにいるといいわ」なんつってあっさり承諾しちまったわけです。

そんな時お袋「バレちゃんの頼みじゃ断れないわ」なんつって俺の方見て意味ありげに微笑んでました。天使の奴が俺のいない間にあることないことおもしろ半分吹き込みやがったようで完全に勘違いしちまってるわけです。

そこで、もはや俺の言葉は本心を隠すための照れ隠しとしてしか受け取ってもらえず、天使はお袋から居候権をあっさり勝ち取ったわけですわ。

んで、俺はもう否定する気力も使い果たし、こうして大人しく夕飯の席に腰を下ろしてるわけです。んで、テーブルの上に置かれた「もの」を目の当たりにして絶句してるわけで……。

とりあえず、分かりやすいようにここに至るまでの流れを簡

潔に説明するか……。

1 天使とお袋が俺の部屋から出ていく。

2 自暴自棄になり「勝手にしやがれ！」と怒鳴り散らしたものの、10分後には冷静に自分を見つめ直し、慌てて二人の後を追う俺。

3 時すでに遅し。

4 それでもお袋の誤解を解く俺。

5 時すでに遅し。

6 「あはは」とのん気に笑う天使。それでも、お袋の誤解を解く俺。

7 時すでに遅し。

8 夕飯を作るためキッチンに立つお袋。

9 「私も手伝うよー」つつつてキッチンに立つ天使。

10 気力を使い果たし、ダイニングキッチンのテーブルの前に腰を下ろし、テレビをぼんやりと眺める俺。

11 なにやらキッチンで盛り上がってる二人。

12 ニュースは今日もろくでもねえことばっか伝えてんな。

1 3 「バレちゃん特製！ イチコロ！ あの頃は私も若かったから……すき焼きの出来上がり！」 ってはしゃぎ声が聞こえたけど、目をつぶる俺。

1 4 今夜はすき焼きみたいだな。

1 5 鍋がテーブルの上に置かれる。

1 6 絶句する俺。

って流れです。

あ、ちなみに前回だけじゃお袋のイメージいまいちつかめねーよって方のためにお袋のこと少し詳しく説明しときます。

1 幽霊。

2 見た目は黒髪を背中の中程までスラリと伸ばした、言いたくねーけど和風美人。ちなみに着てる服はシャツにスカートと至って普通。

3 見た目は普通の人間と何ら変わりねーけど、お袋の周りには常に三つの人魂が浮かび、本人は常に宙に浮いている。

4 死んだ頃のままの姿だからかなり若い（23歳）。

5 幽霊のくせになぜか足はちゃんとある。

6 物に触れることもすり抜けることも自由自在。ただし、生き物に触れることはできない。

7 霊感とか関係なしに誰でも姿を見ることができる。

8 いつまで経っても成仏しねえ。

9 おっとり系天然キャラ。^{ポケ}

っとまあ、現実逃避はこれぐらいにして、鍋の中身に触れてみようか。

というわけで俺はご機嫌で向かいに座ってる天使に、早速素朴な疑問を投げかけた。

「とりあえず、一つ質問があるんだがいいか」

「なに？」

「この鍋の中にあるものはすき焼きのつもりか？」

「違うよ。名付けて「バレちゃん特製！ イチコロ！ あの頃は私も若かったから……」
すき焼きだよ。あっはは」

いや、笑えねえ。全っ然笑えねえよ。

俺は天使を睨みつつ、次に異様に甘い匂いを醸し出す鍋の中身に目を向けた。

ぐつぐつと煮えたぎる鍋の中に敷き詰められた具材は至って普通だ。そこは問題ない。

しかし。

「どうしたのーヒロ君？」

「この特製すき焼きに使用した材料は？」

「えーと。確か、牛肉、白菜、大根、しらたき、豆腐、ねぎ、しいたけ、うどんを入れて」

うん。やっぱり、材料に問題はねえな。

「味付けは、だし汁カップ1/2、醤油カップ1/2、みりん大さじ3、料理酒大さじ4、砂糖大さじ40、バニラアイス600ml（通常のカップアイスおよそ三個分）、チョコチップアイス600ml（以下同文）だよ」

うん。明らかに味付けに問題ありだな。

「あと、隠し味に蜂蜜をありったけ入れてみました」

「……」

こいつ、絶対甘党だな。それにしても。

俺は横で満足そうにうなづいてるお袋に声をかけた。

「お袋？」

「なあにヒロ君？」

「あんたは天使と一緒に料理しときながらなぜに天使の味付け（暴拳）に気づかなかった？」

「あら。だって斬新で面白いじゃない」

「そうか。お前も共犯か」

「あら。ヒロ君だったら、なにを怒ってるの？」

言わなきゃ分からんのか、ボケお袋。

「駄目だよヒロ君ママ。そりゃヒロ君だって怒りたくなるよ」

天使はそう言うと、あははと笑った。

「すき焼きには生卵がつきものでしょ？」

「あら。そうだったわね。私ったらすっかり卵出すの忘れてたわ」

「……………」

「あ、ヒロ君ママ。生卵の代わりに生クリーム使ってみない？ これがまたバレちゃん特製！ 以下省略 にはすっごく合うんだから」

「あら、いいわね。でも生クリーム今きらしてるのよ。バターならあるけど駄目かしら？」

「オッケー」

笑顔でオツケーサインをしてみせる天使。

はい。もう限界です。

「なにがオツケーじゃ、ボケエエエエ！」

たまらずそう叫び、立ち上がる俺。

「こんなモンが食えるわきゃねえだろおがよおおお！ つーか、生クリームでなんてあり得ねえー！　そこまで言わなきゃ分かんねーのかコラアアア！！！」

「えー？　おいしそ　」

「そりやてめえだけじゃああああ！」

「あら。でも斬新　」

「の一言ですべて片づけんじゃねえええ！　つーか、てめえは自分が食べねえでいいからって悪ノリしてんじゃねえよ！」

注意・幽霊は飲食しません。

それから5分間、それはもう俺は精一杯ツッコみました。声が枯れ果てるまで叫び倒しました。しかし、例によって俺の魂の叫び（正論）は頭のネジの外れた（おそらくね）二人に届くわけもなく、異様に甘い匂いを醸し出す鍋だけが残ったわけです。

んで……。

「で、このすき焼き一体どうすんだよ……」

冷静になった俺はその生みの親二人に問いかけました。まあ、聞くまでもなく処分するしかないけどな。

「どうするってそんなの決まってるでしょ？」

天使はそう言つとおもむろに両手をあわせて元気よく言いました。

「いただきますーす」

は？ いただきます？ ……なにを？

俺が戸惑ってる間に天使は鍋にお玉をつっこみ、自分の器に特製すき焼きをたっぷりよそい……。

「これ、これ。この味。あの頃は私も若かったなーって思ったはいけど、思い直してみると年とつた自分に改めて気づいて……。あつは。バカじゃない？」

食べました。意味分からん発言は置いて、こいつ平気で特製すき焼き食ってます。

「お、おい」

「んー？」

「お前……。そんなもん食って平気なのか？」

「あー、駄目だよヒロ君。人は見かけによらないってよく言うでしょ？」

いや、確かにそうだけどそんなもん人間と一緒にすんな。つーかその中身（味付け）はもう知れてんだよ。

「くうー、あつまーい」

「……」

うまい……わけじゃねえ……よな？ うん、甘いつていつてるだけだしな……。しかし、うまそうに食ってるし、ひょっとして見た目ほどまずいわけじゃねえのか？

特製すき焼きを前にもんもんと悩んでいると、お袋が茶碗によそったご飯を天使と俺に渡し、一言俺に言いました。

「ヒロ君。騙されたと思って食べてくらんなさい」

「……！」

天使のうまそうに食う姿。そして、お袋のその一言が決め手でした。

「お、お袋……！ 生卵くれ」

「はい。どーぞ」

これで幾分か味が中和されるかも……なんて考えてる時点で、すでに俺は頭のネジが緩んじまってたわけです。

「い、いただきます……」

「はい。どうぞー」

その1分後、俺は腹を壊し次の日学校を休むことが確定しました。

「あはは。めでたし、めでたしー」

第9話「セクシャルマスターって、つまるところ変態だろ」

心地のいい陽光が降り注ぎ、小鳥のさえずりがどこかしこから聞こえてくる。そんな文句なく爽やかな朝の始まりに俺は自宅のトイレにこもり、ひたすら襲ってくる腹痛に耐え続けてます。

「ヒロ君、大丈夫？」

「……大丈夫じゃねえよ」

ドアの外から響いてくる天使の声になんとか言葉を返す俺。

「っーかお前はいつまでもトイレの外に立ってんじゃねえよ……」

かれこれ30分ほど俺がトイレにこもってる間、ずっと天使はトイレのすぐ外に立って俺に話しかけてきます。正直やりづらいつたらありやしません。

「だって、心配なんだもん」

「……」

……なんか珍しくまともなこと言ってるな。

「それにヒロ君のうめき声がいい具合に私の笑いのツボを刺激して

「

「そっちが本音かい……って、ぐおお……」

「あはは。頑張れ頑張れヒロ君ー」

「ぐ……。いいからお前は……お袋に今日無理っばいから……学校に欠席の連絡入れるように……伝えてこい……」

「はい」

「はあ……」

タベよりはいくらかマシになったものの、この腹痛は尋常じゃねえな……。

しかし、とりあえず体に害のあるものは含まれてないはずなのに、ここまで人の腹を荒らし回すとは……それにあの味はウマイマズいの領域を飛び越えてたしな……。しかし、あえて表現するなら世界中のあらゆるマズさが競演して地獄の交響曲を奏でたような　うん。自分でも言ってる意味不明だ。とにかくあれは人の食い物じゃねえ。そして、腹一杯あれを食ってケロツとしてるアイツは究極の味覚音痴だ。

とにかく、今後天使はキッチンに近づけないようにしよう。

そして、天使の手料理は「デスクッキング」と名付け今後なにが起ころうとも口にしないように注意しよう……。

とにかく今日は腹の痛みが引くまで部屋で大人しく寝るか……。

ってことで、俺は食あたりの薬を通常の2倍飲み、天使をお袋に任せ（不安だな）、部屋へ戻った。

7時間後。

「……ん」

目を覚ました俺はまだぼんやりする意識に身を委ね、しばらく心地いい布団の感触にくるまった。でも、けだるさとは裏腹に目を閉じても一向に眠気は感じなかった。どうやら、だいぶ眠っていたらしい。

「今何時だ……？」

俺はベッドから身を起こして、勉強机の上に置いてあるケータイを手に取った。

「ん？ メール来てんな……」

俺はまだ覚醒しきってない意識を持って余しながら、無造作に受信メールを開いた。

『おう、広之。お前が学校休むなんて珍しいな。なんかあったんか？ いや、言わなくても俺には分かってる。分かってるから安心しろ。健康だけが取り柄のお前がただの腹痛で学校休むわけねーべ？ な？』

異様に内容が長かったんで、途中で切りました。つーか、勝手に腹痛じゃねえとか決めつけたあげく「な？」とか諭すニュアンスを使ってくる勘違い野郎ってこんなにもウザいもんなんだな。

とりあえず続き読むか。

『女なんてこの世に腐るほどいるべ？ 一回振られたぐらいでそんな落ち込むなって！ お前には「セクシャルマスター」の異名をもつこの俺がついてんだろ？ つーわけで学校終わったらお前んちに直行する。礼はいらんぞマイフレンド！』

うぜえ。ムカつくとか腹立つとか通り越して、とにかくうぜえ……。つーか「セクシャルマスター」って、つまるところ変態だろ。

あんまり女から変態変態言われるもんで野郎、開き直ってやがるな。

とまあ、とにかく俺は速攻で『来んな』とメールを送り返した。しかし。

10秒後にメールが返ってきた。

『遠慮すんな。もう着いたから』

「はあ!？」

と驚いたところでピンポンと階下からチャイムの音が響いてきた。

「はーい。あらー、努君じゃない。久しぶりね」

ウザい奴来ちゃったよ……。とりあえず、部屋から下の様子伺うか。

「どうも、おばさん。相変わらずきれいですね」

「あらう。やだわ。努君こそ相変わらず、お世辞がうまいわね」

「いや、いや、マジですよ。マジでストライクと真ん中です。幽霊じゃなかったら、今すぐその魅力に取り付かれ襲っちゃいますから」

いや、人の母親になに言っちゃってんのお前。

「やだわ努君ったら、もう」

まあ、お袋の場合笑って返せるからいいけど、そのうちマジで捕まるぞお前。

「はは、ところで美沙さんいますか？」

そうか。やっぱりそれが目的か。あ、ちなみにうちの姉貴美沙っていいいます。俺より二つ年上の高校三年生です。

「美沙ちゃんは部活の強化合宿に二日前から参加してて今いないのよ。明日には帰ってくるんだけどね」

「あ、そうですね……。じゃあ、広之いますか」

俺はついでかい。

「ええ、部屋で寝てるわ。どうぞ上がって」

ってことで、ウザい奴が家に上がってきます。つーか、もう学校の終わる時間帯ってずいぶん眠ってたみたいだな俺。そのおかげか腹の調子もずいぶんよくなったみたいだ。

「ん？ あれ？ おばさん。キッチンでなんか作ってるあのかわいこちゃん誰ですか？」

あ、天使の奴だな。まあ、あいつに天使の姿が見えるのは必然だ。つか、今日びかわいこちゃん言う奴も珍しいな。

「ミリアリア・バレンタインちゃんよ。昨日からうちに居候してるの」

「い、居候！ ちつくしょう広之のやるお！ そういうことかあ！」

……いや、どういうことだ。

「彼女に一目惚れして片時も離れたくないとかそういうノリかあ！ 俺に内緒で一人だけパラダイスってか、この裏切り者があ！」

いや、ふざけんなバカ野郎。

「うふふ。なにを隠そう二人は人には言えないことまで知り尽くした関係なのよ」

「な、なにに！ 人には言えないような親密な関係！ あ、あんの野郎おおー！」

間違った情報がさらにねじ曲がって伝わっちゃってるよ。

「許さん！ 許さんぞ広之のいい！ 男同士の美しい友情を踏みにじりやがってえええ！ そっちがその気ならこっちもでるところまでやらあ！ ってことで広之のいない間にこっそりいただけまーす」

なんか、すごい勢いで誰かが階段を駆けあがってんな。思ったら部屋のドアが蹴破られ、努の奴が俺の部屋に突入してきた。

「って、お前なにドア壊してんだ、コラア！」

「やかましいわコラア！ こちとら図画工作の成績六年間大変良いで通してんだよお！」

「……いや、なに言ってるんのお前」

「ドアの一つや二つ余裕で直せるっつーことだよおお！ いちいち説明さすなこの裏切り者があ！」

「つーか、それ小学生レベルの話だろ。とりあえず、後で弁償さすからいいけどよ。」

あ、ちなみに紹介が遅くなったけど、この短髪を真っ赤に染めた、髪色以外さして特徴のない冴えない男が野沢努です。

もう充分分かったと思いますが、この男（変態）煩惱が服着て歩いてるような奴です。相手が女なら挨拶代わりに抱きつきませす。

中学の頃からの付き合いだけど、こいつの言動はほんと犯罪スレスレです。まあ、そんなだから言うまでもなく女からはモテません。

「……って誰がモテないどころあ！」

「いや、だからお前も人のナレーションにいちいちリアクションすんな。つーか、お前イフリート相手によく無事だったな」

「当たったり前だろがぁ！ 俺の死に場所はかわいいこちゃんの中
って決まってるんだよぉ！ あんな、ムサキモいおやじ却下じゃボケ
エエー！！」

そう訳分からんこと叫びながら、努は俺につかみかかってきた。

イフリートの奴、しくじりやがって……。と、俺は心の中でそつ
と舌打ちした。

「んなことより、広之！ てめーは俺に内緒であんなかわいいこちゃ
んとウツハウハのキャツピキャピ（ハートマーク）りやがってええ
！ うらやましいぞ、こんちくしょおおお！！」

「いや、俺とあいつはそんな関係じゃねーから。つーか、お前ドア
弁償してけよ」

「くああ！ あいつ！ 今あいつって言った！？ 俺もあんなかわ
いこちゃんをあいつ呼ばわりしてみてええー！！」

「……人の話を聞け」

「おっはようヒロ君。あなたの天使が腹痛にきく特製料理をこしら
えてきましたよー」

と、最悪のタイミングで天使が俺の部屋に入ってきた。

そんで。。

「きさまああああー！！」

「ちょ……おま……くるし……」

努の奴に胸ぐらを掴まれ、ブンブン前後に揺さぶられる俺。

「マイエンジェルってかあ！ 僕だけの天使ってかあ！」

「……」

「あはは。なんか楽しそうだね」

「は！ ミリーちゃん！」

天使の声で我に返った努は、俺の胸ぐらから手を離れた。

「そ、そのお盆に乗せたものは」

「特製料理第二弾！ バレちゃん特製！ 七時間じっくりコトコト煮込んだ愛と友情と裏切りのセレナーデ 完成。ヒロ君どうぞ召し上がれー」

「ひ・ろ・ゆ・きいいいい……」

「……」

……お前ら、少しは病み上がりの人間を労ろって気にはならねえのか？

「はい。ヒロ君、あーん」

そう言っ て天使は器に入ったデスクツキングの内容物をスプーンにすくい、俺の口元に近づけてきた。

「……いらねえよ」

「なっ！ きつさまあああああ！ 亭主関白気取りかあ！ 俺は好物以外食わねえんだよってかあ！」

「うるせえよ！ あんな異臭放つ緑色したドロドロのスープ飲めるわけねーだろ！」

そう言いつつ、俺はつかみかかってくる努を振り払った。

「えーヒロ君食べてくれないの？ せっかく苦労して七時間も弱火にかけて放置してたのに」

「ごろ寝して出来上がりってか。」

「ぬうつ！ 安心しろミリーちゃん！ 俺が代わりに食べてあげるから！ だから、こんな薄情者とは手を切るんだ！ ていうか、俺にもあゝんして、はい、あゝん」

そんなことを言いながら大口を開けてる間抜け面を見て、俺はしみじみと思った。

こいつ、バカだ……。

んで。

「はい。あゝん」

「ふっふっふ。悪いな、広之」

「……」

俺は黙って天使にあぐんしてもらって嬉しそうな努を見守った。

「ああ、幸せ……。もう思い残すことはなにもない……。い……。？」

はい。昇天しました。口から泡吹いて倒れながらも、表情は幸せそうです。

「ヒロ君？」

「だから、食わねえっての。つーか、なに入れやがった？」

「え？ 納豆とイチゴジャムとにぼしとクサヤとバニラエッセンスだよ？」

明らかにすぎ焼きよりグレードアップしてんな……。

「とりあえず、救急車呼んどくか……」

「あはは。努君って面白いね」

「……」

とりあえず一命はとりとめました。

第10話「いや、いい加減にしとけよお前」

今日は土曜日なんで学校は休みです。それで本日夕方には姉貴が部活の強化合宿から帰ってくるってんで、俺たち（俺・お袋・天使）は今近所のスーパーに夕飯の買出しに来てます。いい年して親と買物ってお前マザコンか？ ツーツツコみはしないでください。

「今日美沙ちゃん合宿から帰ってくるから、うんとご馳走作らなきゃね」

「え、そうなの？ だったら私が疲れなんて吹き飛んじゃう特製料理特別にこさえてあげなきゃ」

「うふふ。ありがとう、バレちゃん」

「どういたしまして」

「いや、ちょっと待てコラ」

って流れです。いくら天使に「お前はうちの炊事等に一切関与するな」と言っても「私の特製料理なくして家庭の幸せはあり得ないわ」なんて意味不明なこと言ってる人のいうこと聞かねえもんだから、仕方なく二人の買い出しについてくる（監視する）ハメになっちゃったわけです。放っておいたら、姉貴もデスクッキングの餌食になりかねえからな……。

さて。俺たちは今お袋、天使、俺の隊列をしき店内を回ってます。お袋が買物籠に商品を入れ、天使が買物籠に商品を入れ、俺が買物籠から商品を戻す。まさに完璧な布陣です。

「えーと、鶏肉に、ジャガイモに、にんじんに、たまねぎに」

「イチゴジャムに、ブルーベリージャムに、鯖さばの味噌缶詰に、桃の缶詰に」

そして、イチゴジャムとブルーベリージャムと鯖さばの味噌缶詰と桃の缶詰を無言で陳列棚に戻す俺。

「？ ヒロ君？」

「なんだ」

「何者かの作為の跡がこれでもかと感じられるほど、買い物籠の中から私の選んだ食材が片っ端から消去されてるのは気のせい？」

「それを食材だと平気で言ってる奴から身の安全を確保するために俺はここに来てんだよ」

「なによ、なによ。私はヒロ君のお姉さんのため」

「を思うなら、キッチンに立とうとすんな」

俺の言葉を聞いて、天使は「ぶー」といいながらふてくされ気味に頬を膨らませた。そんな天使にお袋が見かねて一言。

「ちょっと、ヒロ君。意地悪しないの」

「……」

そして、お袋はふてくされてる天使に「ごめんね、バレちゃん。ヒロ君ったら恥ずかしがりやだから、好きな子には素直になれないのよ」なんて言いやがりました。しかも、天使はそれに便乗して再び機嫌を直し買物籠に特製料理の具在（くさやとか納豆とか青海苔とか）を入れだしやがりました。

「うふふ。ヒロ君？ 女の子には優しくしてあげなきゃね」

「いや、いい加減にしとけよお前」

とりあえず天使の入れ込んだ爆弾（具材）は残らず取り除いてきました。

そんで六時間後。

夕飯時になり、そろそろ姉貴も帰ってくるだろうってんで俺と天使とお袋はリビングキッチンテーブルの前に、夕飯の支度を整え座ってます。ちなみに、テーブルの上には大皿に鶏のから揚げとポテトとサラダが添えられた見た目うまそうなおかずが置かれています。主食はカレーで、朝っぱらの買い物から今まで不眠不休で監視を続けた俺の苦勞のかいあり、天使は一切それらのものに手を触れてません。まあ、そのおかげで俺は今クタクタだが（一日中天使のお守りをするはめになった……）。

「ねえねえ、ヒロ君。ヒロ君のお姉さんってどんな人？」

俺の向かいに座って、天使は当然の質問を俺に投げかけてきた。しかし、俺はその質問に答える気にはなれず（いろんな意味で）すぐ分かるよ、とだけ答えておいて、席を立った。

「どこ行くの、ヒロ君？」

「トイレだよ」

なんせ、朝っぱらからずっと天使のせいでトイレに行く暇もなかったからな。料理も出来上がっちゃまってるし、もう大丈夫だろ。と妥協した俺はトイレへと向い、ちょうど俺が用をたすと同時に「ただいまー」と少ししんどそうな姉貴の声が玄関から響いてきた。

「この声の感じ……。助かった……。天使のほうだ」

俺は独り胸をなでおろしながら、トイレから出た。まあ、俺の台詞の意味はすぐに分かります。

んで、トイレから出た俺がダイニングキッチンに入り口に立つと、ちょうど中ではお袋が天使のことを紹介し終え、姉貴が戸惑いながらも快く天使の居候を承諾しているところだった。って、おい！ちよつと、待て！

「姉貴！ なにそいつの居候あつさり承諾しちゃってんだよおお！」

俺は力いっぱい戸を開き、ダイニングキッチンの中に立っている制服姿の姉貴にビシッと指を指した。しかし、指を指された張本人はそんなこと気にも留めずに「あら、広之。ただいま」なんて無邪気な笑顔で声を出すもんだから、こっちとしても出した指は引っ込められないが、素直に「お、おかえり……」と応対するしかない。

お袋譲りの背中まで下ろしたさらりと長い黒髪に、いまだ発展途上の大人顔負けの体つき。その豊富なバストも、抱きしめると折れそうな細い腰も、引き締まったヒップも、男なら誰もが目を向けてし

まうだろう　って、実の姉の紹介になんてこと言ってたんだ、俺！
とにかく、うちの姉はお袋そっくりの和風美人ってことだ。文句の
つけようのないプロポーション。それでいて、男心をくすぐる無邪
気な笑顔。素直で家族思いの性格。それら三種の神器の威力は姉貴
のファンクラブが学校に立ち上げられるほど強力なものだ。

しかし、今はそのお人よしの姉貴の性格が完全に裏目に出てやがる。

「？　どうしたの広之？」

「いや、だからなんでそいつの居候あつさり承諾しちゃったわけ！」

俺の鋭いツッコみに、姉貴は困ったように微笑んで「だって、困っ
てる人は放っておけないじゃない」なんて、言ってます。そんで、
天使は「あはは」と笑ってます。

「コイツのどこが困ってるように見えんだよ……？」

「なにムキになってるのよ広之。あなたも、この子の居候OKした
んでしょ？」

「……いや、それはしたけどもよ」

「だったら、いいじゃない」

そう言って、にっこり笑う姉貴。

「……」

こつなったら、もう最後の手段しかねえな……。

ふっふっふ。なぜ、こんなにもまともなうちの姉に天使の姿が見えるのかというと、それはある理由のせいなわけで、その理由は次回に持ち越しなわけで。

第11話「ほんと俺は姉貴が苦手だ」

姉貴が天使の居候をあつさりOKしてしまい、和やかムード満点のダイニングで、苦渋の表情をしているのはもちろん俺一人だけだった。そして、そんな俺の心境などまるで無視でお袋が「じゃあ、ご飯にしましょ。美沙ちゃんのこと待ってたから二人ともお腹すいてるでしょ」と言い出し、天使の居候がいよいよ本格的に確定へ向けて突き進もうとしていた。

「……………」

こうなったら、もうあの手しかねえな……。もはや、天使の居候阻止の光明はその手しか残っていないことを悟った俺は、一人神妙に深いため息をついた。

「じゃあ、私荷物部屋に置いてくるね」

そう言って、穏やかな笑顔を残して姉貴はリビングを出て行った。

「……………」

「ご機嫌でテーブルの前に腰を下ろす天使。三人分のカレーを皿によそってお袋。そして、覚悟を決める俺。」

「？ あれ？ ヒロ君どこ行くの？」

リビングを出かけたところで、天使が俺に声をかけてきた。俺は振り返ると、わざとらしく微笑を浮かべて見せて言っちゃった。

「ふ……。地獄だよ」

「あはは。それアホの物真似？ 上手だね」

「く……」

覚悟を決めた人間の、柄にもないことをやって見せて少しでも気分を紛らわそうという本人にもよく分からん心理を、こいつに理解してもらおうとは思わねえけど、やっぱムカつくな……。つーか、誰のせいで、俺がこんな追い詰められてると思ってるんだ。とは思いながらも結局口に出さない俺は、つくづく甘いなと思う。

そんで。

リビングを出た俺はゆっくりと一段一段踏みしめながら階段を昇り、姉貴の部屋の前に到着した。ドアが閉まっているということは、荷物を置きに来たついでに着替えでもしているのだろう。俺は、今一度深くため息をついてから、ゆっくりとドアをノックした。

「はい？」

ドア越しに聞こえてくる姉貴の優しい声が、ますます俺の気分をブルーにした。姉貴が無邪気であればあるほど、俺の罪悪感は募っていく一方だ。

「姉貴？ 俺だけど」

「広之？」

俺の名前を呼びながら、姉貴がドアを開けた。Ｔシャツにジーンズというラフな格好をした姉貴が部屋の中から顔を覗かせる。

「どうしたの？ わざわざ呼びに来てくれた？」

「あ、いや、そうじゃなくて。その、天使のことなんだけどさ……」

本人を前にすると、決めていた覚悟もどうしても揺らいでしまう。気がつくのと、俺はそんなことを口に出していた。

「その、もう一度さ、か、考え直してくんねーかな」

「それ、ミリーちゃんを家から追い出せってこと？」

微笑を携えつつ、言葉を発する姉貴。しかし、顔とは裏腹な直球ど真ん中の台詞に、俺は戸惑うしかなかった。まさか、姉貴の口からそんな言葉が飛び出してくるとは想像もしていなかったのだ。そして、黙っている俺の心境を見透かしたように、俺を見て小さく笑う姉貴。

「な、なにがおかしんだよ……！」

「だって、広之動揺してるから」

「し、してねーよ！ つーか俺はそうなることを望んでんだからな

「！」

「そっつ？」

そう言って、腰をかがめ上目遣いに俺を見てくる姉貴。

「あ、あのなあ！ 姉貴のいない間に俺すっげえ大変な目にあっただからな！」

ムキになつてしまふあたり、俺はまだまだガキだということだろうが。気がつけば俺は天使との出会いに始まり、イフリートに殺されかけたこと、天使のデスクッキングを口にし腹を壊したこと、その他もろもろの苦労話をすべて姉貴に力説してしまっていた。一気にまくし立ててしゃべり終えた後、我に返り姉貴の顔をうかがうと、姉貴は案の定吹き出していた。

「わ、笑うなよな！ こつちは笑い話になんねーんだぞ！」

「ごめんごめん。でもさ、なんだかんだ言っても広之だってミリちゃん居候OKしてるよね？」

「だ、だからそれはあいつに弱みを握られて仕方なくだよ！」

「ふうん。弱みって、どんな？」

そんなことを平気で聞いてくる姉貴に、おそらく悪気は100パーセントない。

「あのなあ。人に言えないようなことを弱みって言うんだろ」

「ふふ。でも広之のことだから、そんな深刻なことじゃなさそうだよね。好きな子のこと知られたとか、そういう感じじゃない？」

「ち、違うー！」

大当たりだが、俺にもプライドがある。まあ、ムキになって否定してる時点で肯定したも同然か……。つーか、なんか姉貴相手だといつも調子狂うんだよな。と思ってる、自然にため息が漏れてしまう。しかし、姉貴が俺の弱みについてそれ以上ツッコんでくることはなかった。

「ねえ、広之。私思っただけどさ」

「？」

姉貴は俺を見ると、壁に寄りかかりながら、一度合わせた視線を俺から逸らした。

「広之があの子のこと心の底から迷惑だっと思ってるなら、とっくにあの子のこと追い出してるんじゃない？」

「は？ なんだよそれ」

「相手が女の子だとか、住む場所がないとかになってくると、誰でも同情するでしょ？」

「……何の話だよ」

つーか、始まりは不法侵入でそんな余地は毛ほどもなかったけどな。

「でも、同情なんて軽いものだし、広之の話聞いてると、どうして広之があの子のこと追い出さなかったのかって、単純に不思議に思えるの。でも、それってやっぱり広之があの子のこと本気で憎めな

いからじゃないの？」

「そ、そんなんじゃないよ。勝手なこと言うな」

「そう？ でも私の知ってる広之はそういう人間だし、今広之が一番望んでる形も分かってるつもり」

「？ 俺が一番望んでる形？」

「そ。いやとは言えても、出て行けとまでは言えない不器用な弟の本心。 だから、やはり私はあの子の居候をOKしとく」

そんな恥ずかしい台詞を口にしながら、恥ずかしげもなく俺に笑いかけてくる姉貴。ほんと、俺は姉貴が苦手だ。

「……あのな。それ、完全な思い違いだかな。第一、弱み握られてなきゃあんな奴とくに追い出してるっての」

「はいはい。そういうことにしといてあげる」

「……」

なんか釈然としねえけど、これ以上反論しても無駄だと悟り、俺は口をつむいだ。そんな俺の頭をほんと軽く叩いて、姉貴は「ほら、お母さんとミリーちゃん待ってるわよ」と言っつて、俺の背中を押した。

「分かってるよ。おい、押すなっつて」

二人して廊下を歩きながら、俺は姉貴に文句を言った。しかし、

姉貴は俺の文句など聞かずに早足で俺の背中を押しながら廊下を駆けていく。正直、そんな無邪気な姉貴を見ているうちに、必死こいて天使の居候を阻止しようとしてる自分が馬鹿馬鹿しく思えていた。

まあ、姉貴に免じて今は勘弁してやるかな……。

と、それで締めくくられればめでたしめでたしだったのだが…

…。

「あつ」

階段を降りきったところで、背後からそんな声が聞こえて俺は反射的に振り返った。途端、つまずいて足を踏み外した姉貴が階段の上から俺めがけて目の前に落下してきていた。

「きゃあー！」

「あ、危ねえ！」

身を呈して姉貴をかばい、仰向けに床に倒れこむ俺。しかし、後ろ向きに倒れながらも持ち前の運動神経のよさで、しっかりと片手で姉貴を支え、もう一方の手で後頭部を守った俺に怪我はない。うん。怪我はないけど、この状況は非常にまずい。

断っておくけど、姉貴が俺の上にかぶさって、あんなところやこんなところの感触が……っていう意味じゃない。確かに、そういう状況だけど俺が今感じているまずさというのは、ストレートに己の身の危険へつながっているしゃれにならねえ危機感というやつだ。

「ん……」

俺の胸に顔をうずめていた姉貴が、甘い吐息に似た声を漏らした。そんな中、俺は緊張のあまり、姉貴をかばうために姉貴の背中に回した腕を放すことさえできなかった。まあ、はたから見れば今の状況は世の男にとってうらやましい光景にしか見えないだろう。なんせ、美女（俺にとっては実の姉だけど）に押し倒され、あまつさえこっちからもくるもの拒まず的に、相手を抱いてるみたいな格好なのだから。しかし、この直後の光景を見て、果たして「うらやましい」なんて言える男が、この世界に何人いるだろうか？ とまあ、くだらない現実逃避に浸ってる場合じゃねえな。

ってことで、俺は恐る恐る姉貴に声をかけた。

「あ、姉貴……？」

俺の胸に顔をうずめたまま返事をしない姉貴。それによって、俺の中で危機感が数倍に膨れ上がっていった。

「お、おい。だ、だいじょう……ぶへ！」

突如腹に走る激痛。まるで鈍器で思いっきり殴りつけられたようなとてつもなく重い痛みの原因は、あごを引いて姉貴の様子をうかがうことで知ることができた。

俺の胸に顔をうずめながら、しかも密着した体勢から姉貴が俺の腹を器用に殴りつけているのだ。しかも、機械的に何度も、何度も、何度も、何度も。

「ぐ！ ぶ！ あ！ あね！ ぎ！ ちょ！ あね！ ぎえ！ あね！ ぎ！ ！ ！ ！ ！ ……」

そして、ぼやけていく視界に映ったのは、俺の胸から顔を上げた姉貴の薄ら笑った顔だった。

「おらあ！ どらあ！ こらあ！ せい！ 広之てめえ！ ガキの分際でなに気安くお姉さまに抱きついてんだよお！ ごるあ！ ごるあ！ ごるあああ！ あーはっはっは！」

そこにいるのは、数秒前までの優しい姉とはまったく別人（本人）の悪魔だった。

そう。うちの姉、実は二重人格なのだ。詳しくはまあ、そのうち話すけども……。今はほら、俺死にそうだから勘弁してくれ……。

「あーはっは！ 寝てんじゃねーぞ、こらあ！」

「……………」

「きゃああ！ ヒロ君！」

「うわわ！ 美沙ちゃんが凶暴化して、ヒロ君襲ってるー！」

騒ぎを聞きつけ二人が駆けつけたときには、俺の意識は遠い世界に旅立っていた。

第12話「シスコンって正直キモいもんね」

まだ姉貴が十二歳の頃に起きたその事件により、姉貴の人生は大きく狂うこととなった。って感じで今回は話を始めようと思う。

「あ、ちよつと待ってヒロ君」

と思つたら、天使が物語の進行を制止した。

「あ？ なんだよ」

「ただ語るだけじゃつまないでしょー？ どうせなら、その話私たちが再現V作らない？」

「……」

また、コイツは面倒くせえこと言い出しやがった。

「……ヤダって言ったら？」

「心のアイドル暴露の刑」

ってわけで、再現V作んぞコンチクショウ！

「ふんふん。つまり、幼い頃美沙ちゃんは一人で学校から帰途にいてる途中で、変質者に遭遇。素っ裸の上にトレンチコートだけを身につけたその典型的な変態に襲われそうになったとき、自分の身を守るために美沙ちゃんの中でもう一人の凶暴な人格が覚醒しちゃ

「たわけかー」

「……今の説明でこれから作ろうとしてる再現Vの必要性なくなつたな」

俺たちは今、地元の小学校の前に来ていた。その目的は言うまでもなく姉貴の過去のトラウマを再現Vにまとめるためだ（たち悪いな……）。

「なに言ってるのヒロ君？ まだ、謎になってる美沙ちゃんの人格が変わる要因とかを織り交ぜつつ面白おかしく再現Vを」

「姉貴は変態に襲われて、逆に振り返りにした時の後遺症により、男性恐怖症になった。それから、知らない男には触られただけで過去のトラウマが引き金となり自分を守るために本来の優しい人格とは真逆の凶暴な人格が表に顔を出すようになった。身内の俺でさえ、抱きつくとか、きわどいスキンシップ的な行為をしようもんなら、スイッチが入っちゃうんだよ。つーか、人のトラウマを面白おかしく再現しようとするな、アホ」

つまり、今回はこちらから姉貴のスイッチを入れ、凶暴化させて天使の居候を阻止しようとしてたところ、不慮の事故により、俺は半殺しの目にあつたわけだ。ちなみに、スイッチの入った姉貴も昨日俺が気を失ってる間に天使の居候あっさり承諾したみたいだけだな……。

「ふむふむ。でも、当時まだ小学生だった美沙ちゃんによく変態を振り返りにできたねー」

「ああ……。姉貴は六歳の頃から空手を習ってるかな。今じゃ、

学生日本一。言うまでもなく、当時の実力もそこら辺の大人よりよっぽど強かったんだよ」

「へえー。でも、変態返り討ちにしたのに、なんで今もトラウマになってるの？」

「いや、そりゃ思春期真っ只中の女の子が素っ裸の変態親父に襲われりゃ、トラウマにもなんだろう……」

「あはは。でも逆に、変態親父のほうもトラウマになってたりして」

「……いや、笑えねえよ」

現場を目撃したわけじゃねえが、通行人が姉貴を止めなきゃ、変態親父は確実に撲殺されてたらしいから……。しかしまあ、それも当然の報いだ。いちいち男に触れられただけで入れ替わる人格。しかも、元に戻ったとき、スイッチの入っている間の記憶はないらしい。表には出さないけど、当時の姉貴は相当キツかっただろう。いや、今だっけきつと。

「よーし。じゃあ、そろそろ再現V作るっか！」

「いや、謎は明らかになったんだからもうその必要はねえだろ。つーか、小学校の前でビデオカメラ片手に突っ立ってちゃ、俺のほうに変質者に間違われちゃうだろが」

そう。再現Vを作るためと、天使が家にあっただビデオカメラを持ち出し、半ば無理やりそれを俺に持たせているのだ。しかも、時間帯は図って夕方前のちょうどいい具合に下校時間。今にも昇降口の

ほうから生徒が出てくるのではないかと、こっちは気が気じゃねえ。そして、そんな俺の様子がまた周りから見れば怪しさ満点なんだろうな、畜生。

「だめだよ、ヒロ君。そのビデオカメラがなきゃ、再現V作れないでしょ?」

「だから、その必要性がねえって言うてんだよ!」

思わず怒鳴ってしまったから、はっとして周りに目を向ける。案の定、通行人の方々がいぶかしげな目を俺に向けていた。そう、天使の奴は常人の目には映らないわけだから、今の俺は不審度120パーセントってわけだ。

「んもう、ヒロ君ったら何にも分かってないんだから。それにもう、後には退けないんだよ?」

「あ? どういう意味だよ?」

「だって、私美沙ちゃんここに呼んでるもん」

「はあ!??」

驚きのあまり、声の裏返る俺。そんな俺をよそに、天使は唐突に向かい合う俺の背後を指差した。

「あ。噂をすればあれって、美沙ちゃん」

天使の言葉に俺は勢いよく振り返った。そして、俺の目に飛び込んできたのは、数十メートル先の歩道をこちらに向かって歩いてく

る姉貴の姿だった。

「あら、広之？　もしかしてあなたもミリーちゃんに呼ばれてたの？」

俺たちの元まで来ると、きよとんとした顔をしてそんなことを言う姉貴。

「姉貴こそ、なにやってんだよ！　今日友達と遊ぶって言ってただろ！」

「うん。でも、ミリーちゃんがどうしても大事な用があるっていうから途中で切り上げてきちゃった」

「そうそう。とっても大事な用事なの」

「うそつけ！」

しかし、コイツまたなんで姉貴をここに……。まさか、再現Vに姉貴使う気じゃねえだろうな……。

「早速だけど、これから美沙ちゃんには再現Vに出てもらいまーす」

やっぱり、ビンゴー！

「って、アホかお前ええ！　ちったあ、人の気持ちってもんを考慮おおお！」

「むー。なによー。私なりにちゃんと考えてるもん」

「いや、どこが！ お前の言動どこをどう解釈すればそうなんだよ、言ってみろおお！」

「あはは。怒り心頭シスコンヒロ君」

「シ、シス……！ 誰がシスコンだ、ゴラアア！」

「ち、ちよ！ 落ち着いて広之！」

天使につかみかかろうとした俺と天使の間に入り、姉貴は俺を制止した。そういや、天使につかみかかったりしたら、イフリートが出てくるんだったことを思い出した俺は、舌打ちして二人から顔を背けた。

「ねえ、どういうこと？ ぜんぜん話が見えないんだけど……。それに、どうして広之ビデオカメラなんて持ってるの？」

「うん。それは、かくかくしかじかかってわけで、そのときの再現V私たちが作っちゃおうってことなのー」

天使の話聞き、姉貴の表情は明らかに戸惑っていた。それを見て、俺はすかさず天使に向けて声を発した。

「お前、いい加減にしとけよ。これ以上は洒落じゃすまさねえぞ、ゴラ」

「シツスシツスコンコンシツスコンコン」

「そこに直れ、ゴラアアアアア！」

「ち、ちよつと、広之!」

しばらくお待ちください。

「ほんとにヒロ君は何にも分かってないんだから。私はね、美沙ちゃん、のトラウマを解消するためにはちゃんと過去と向き合わなきゃ駄目だと思ったからこそ、この再現Vを作ろうとしてるのよ」

「いや、お前さっき面白おかしくとか言ってたよな?」

天使につかみかかるのを姉貴に止められ、何とか落ち着きを取り戻した俺は、もう一度天使と会話を始めた。つーか、そろそろ小学生が校内から出てこないか本気で心配になってきたな。通行人の目もかなり気になる(周りからは俺が誰もいない方向に怒鳴っているようにしか見えないだろうからな。ちなみに、姉貴も天使のその特性は知ってます)。

「待って広之」

黙って俺と天使の様子を見ていた姉貴が、俺の前に割って入った。その緊張した面持ちは、怒りのためかどうかは分からないが、姉貴がそんな顔をするのは稀なことだった。

「ミリーちゃん」

感情を押し殺した姉貴の静かな声が、天使に向けられる。あまりの緊張感に俺は思わず息を呑んだ。まさか、姉貴の性格からして天使に殴りかかるなんてことは考えられないが、ことがことだけにどうしてもそれを危惧してしまう。スイッチなしでも姉貴の実力は学生日本一。果たして俺に怒りに任せた場合の姉貴を止めることがで

きるだろうか？ つーか、そうなった場合、そのドタバタでイフリートが出てくることは請け合いだ。その上、間違つて姉貴のスイッチが入つちまおうもんなら……。だめだ。考えただけで目眩がする。

と、俺が思考にふけっっている間（その間5秒）に、姉貴が右手をおもむろに肩の上まで上げた。ま、まさか、殴る気か！ と慌てて俺は背後から姉貴を止めようと足を踏み出した。

「姉貴、やめ」

「ありがと！ 私もちろん協力するわミリーちゃん！」

「る？」

ぴよんとかわいく一歩前に飛び跳ね、姉貴は振り上げた手で天使の肩をポン、と軽く叩いた。一方、不意に目標物が遠ざかった俺はというと、それはもうありえないぐらい見事にずっこけた。

「ぶへえ！」

「？ なにしてるの、広之？」

「それはこっちの台詞だよ！ 何でそこで協力すんの！」

倒れたまま、顔だけを上げて姉貴に抗議する俺。しかし、姉貴に悪びれた様子はまったくなかった。

「だって、ミリーちゃんが私のことそこまで考えてくれてるなんて、嬉しいもの。それに、このことで変に気を遣われるのって、正直少し重荷かなって思うし」

「ガーン（声にならない声）」

「痛恨の一撃。ヒロ君は999のダメージを受けた。ヒロ君は死んでしまった。パーティーはヒロ君一人を置いて逃げ出した。シスコンって正直キモイもんね」

こ、この野郎……！

「ひいろおゆうきい〜。見つけたぞ、こらあああああ！」

って、今度はなんだちくしょう！

俺はことごとく精神的ダメージを受けながらも背後から響き近づいてくる大声に反応し、立ち上がった。見ると、はるか100メートルほど先の歩道から、何者かがものすごい勢いでこちらに向かって走ってきていた。

って、努じゃねえか、ありや……。

短髪に派手な赤髪がトレードマークのセクシャルマスターは全力で走ってきながらも、こちらまで半分ほどの距離で失速し、こっちにたどり着く頃には息も絶え絶えに死にかけていた。そう、なにを隠そうこいつは虚弱体質なのだ。しかし、努は死にそうになりながらも姉貴と天使に飛びつくことは忘れなかった。

「ミリーちゅわーん。美沙すわーん」

「……」

姉貴と天使に向かって飛びついた努を空中で叩き落とす俺。地面に撃沈した努は口から血をばたばたこぼしながら、息も絶え絶えに恨めしそうに俺につきかみかかってきた。

「ひ、ひろゆき、貴様……。いつつもいつつもこの俺の邪魔を……！」

「いや、いい加減お前の行為は自殺行為だということを知れ」

「こんなところで……はあ……偶然二人に出会えた運命を俺は……はあ……素直に表現してる……ぶへ……だけだろうがあ！」

「さっき俺に見つけたとか言ってたか？」

「黙れ、このシスコぐへえ！」

俺は死にかけた努にとどめのボディブローをかました。あえなく地面に崩れ落ち、努はピクリとも動かなくなった。

「ちょっと、広之。やりすぎよ！」

そう言っつて、姉貴は努の下へ駆け寄った。そして、肩にかけていた小ぶりのバッグからハンカチを取り出すと、それを努の奴に優しく差し出す姉貴。

「あ、ああ……。美沙さんがこの俺に……。こ、これはもう……私を抱いてくださってことであらう！」

俺は無言で努の腹を踏みつけた。

「広之！」

「いや、コイツはこれぐらいじゃ死なねえから。それより、お前が何でこんなところにいるんだよ？」

「ふ……。昨日から美沙さんが合宿から帰ってくることは知ってたから……。しかし、昨日は腹を壊して一日中動けず、今日になっても半日は動くこともままならず……。やっとの思いで動けるようになり、お前の家へたどり着くと、ミリーちゃんとお前が二人して家を出たとおばさんが言っていた。それで、ずっとお前たちの行方を捜すため外を徘徊してたわけだ……」

「……お前バカだろ？」

「うるせええ！ ミリーちゃんは俺のもんだ！ 美沙さんも俺のもんだ！ つーか、この世の女はすべてこの俺のもなんだよ、文句あるかコラア！」

「……とりあえず、もう10発ぐらい入れとくか」

しかし、それも姉責に止められ、10分後に復活した努に天使が一言。

「じゃあ、再現V努君にも協力してもらおっか」

こうして、俺の心労はさらに10倍に膨れ上がったのだった……。

第13話「こんなところで死んでたまるか」

学校の校門前にて。

変態A「ひっひっひ。親分。今日は記念すべき親分の100人目記念のために飛びっきりの上玉に目をつけときやしたよ」

変態B「そうそう。あ、出てきやした。あの女ですぜ。品行方正、成績優秀。学校じゃちよつとしたファンクラブまで作られてるらしいですぜ」

変態親玉「うむ」

三人、校門を出た美沙の後をつける。人通りの少ない道に差し掛かったところで、三人、美沙の前に回りこむ。

変態A「ひっひっひ。君、佐々木美沙ちゃんだよな？ だよな？」

美沙、一步後ずさり怪訝な表情を作り「はあ」とうなづく。

変態B「へっへ。どうぞ、親分」

変態親分、厳かに美沙の正面に立ち身に着けたトレンチコートを脱ぎ捨てる。

なにが起きたのか理解できず、固まったままその場から動けない美沙。一方、変態親分はニタリと気味悪く笑い、ゆっくりと美沙に手を伸ばす。変態A、B、親分の後ろでその様子を満足げに眺める。

以後、アドリブ。

「ってのが私の作った脚本ね。みんなちゃんと、台本どおりに行動してねー」

「お前、いつの間にかこんなもん……。つか、以後アドリブって、台本の意味ねーじゃねーか」

天使に渡された台本に目を通した後、俺は天使に言ってやった。しかし、天使は「リアリティを出すにはアドリブが一番」なんて言って、俺の苦情完全無視です。

つか、お前自分が楽しむことだけ考えてないか？

「はい、はい。ミリーちゃん一つしつもん」

「はい、努君」

「台本の中に変態役三人いるけど、俺と広之入れてももう一人足りないよね？」

「あはは。大丈夫だよ。変態親玉はこっちでもう用意してるから」

そう言うと、天使は右耳につけたピアスをつまんだ。

「イフリート召喚！」

天使の言葉とともに、ピアスはまばゆい光に包まれた。そして、その光から現れたのは……。素っ裸の上からトレンチコートを着込まされたイフリートだった（もちろん、ふんどしは装着してます）。

「じゃ、イフリートは変態親玉の役お願いね」

「……ウス」

そうか。ご主人様の命令には絶対服従ってわけか。その心意気……あんだ男だよ、おっさん。まあ、ただ単に逆らえないだけって気もするが、それは置いといてな。

「おっさん……」

俺はイフリートのそばに立つと、彼に同情の眼差しを向けた。イフリートは俺の同情の眼差しを受け取ると、ふっと微笑を浮かべていた。

「……なんにも言うな、小僧」

いつか、二人でアイツの呪縛から抜け出そう……。俺とおっさんは無言でうなずき合い、ここに確かな男の友情が芽生えたのだった。

「んじゃ、アホ二人のやり取りが終わったところで、撮影スタートね」

「この、クサレ天使が……！」

俺の心の声はあっさり無視され、撮影はスタートされることとなった。ちなみに、一人だけイフリートとの面識のない姉貴には、天使がうまくフォローを入れたようだった。

んで、配役は勝手にこんな具合になりました。

変態 A (友情出演) …… 野沢努

変態 B …… 俺

変態親玉 …… イフリート

佐々木美沙役 …… 姉貴 (つーか本人)

脚本、演出、監督、カメラマン …… 天使

もやは、再現Vでもなんでもない気がするが、姉貴は校門の前に立ち、俺と努とイフリートは人気のない路地に身を隠し、スタンバイOK。天使の「アクション」の声で、撮影は開始された。ちなみに、用意された衣装を身に着けているのはイフリートだけだ。ただ街を歩いているだけで職質をかけられそうな勢いの、見事な変態っぷりだが、周りからは見えないはずなので害はない。と、そうこうしているうちに、姉貴がこちらのほうへ歩いてきていた。天使の奴は、姉貴の横を歩きながらビデオカメラを姉貴に向けている。

つーか、天使の奴が普通の人間には見えないのなら、奴の持つビデオカメラは周りからはどう見えるのだろうか？

「きゃあああー！ ビデオカメラが宙に浮いてるうー！」

姉貴とすれ違おうとした通りすがりの方が、悲鳴を上げてきびすを返して逃げ出した。それを合図に、周りの人間がいつせいにその異変に気づき、悲鳴を上げながら逃げ惑う。そして、天使はおかしそうにその様子をビデオカメラで撮影していた。

「なるほど。今後、気をつけねえとな……」

まあ、周りの人間がうまくいなくなってくれたので、ここはよしとしよう。姉貴も天使の奴に促され、再びこちらに向けて歩き出し

たようだしな。

「なあ、広之」

「あ？ なんだよ」

「これから俺は変態Aの役を見事に演じきるぜ。ミリーちゃんの頼みとなれば、絶対に手を抜くことはできないからな」

「……」

マジな面してそんなことを言っている努を、俺は無言で見守った。

「つまり！ 今から俺がなにをしようと、それは変態Aの役柄！
すべては演技ということで許さぶへえ！」

俺は何も言わず努にボディブローをかました。どうやら、先のダメージを引きずっていたらしい努に、その一撃は致命だったらしい。努は「む、無念……」とほざきながら、その場に崩れ落ちピクリとも動かなくなった。

そうこうしているうちに、もうそこまで姉貴が近づいてきていたので俺とイフリートは路地から抜け出し、姉貴の行く道を塞いだ。

「ひっひっひ。君、佐々木美沙ちゃんだよな？ だよな？」

台本どおり努が変態Aの台詞を。

「って、何でお前もっ復活してんだよ！」

「ふ……、こんなおいしい場面で、セクシャルマスターたるこの俺がおとなしくオネンネなんてしてられるかよ」

「いや、お前虚弱体質って設定だろ。あんま無視してっと、後が怖えーぞ」

「なにを言ってるのかさっぱり分からんな」

と言つてのけた直後、努が俺の視界から一瞬にして消え去ったのは本当に「あ」という間だった。俺は「あ」と言いながらも、とうとう努の奴に天罰が下り、その存在を理不尽なまでの力（絶対的権力）によりデリートされたのかとも考えたが、それはどうやら考えすぎだったようだ。なぜなら、努が俺の視界から消え去ると同時に、いつの間にか姉貴が俺の視界に入ってきていたからだ。

もっと分かりやすく説明するなら、努がさっきまで立っていた位置（俺のすぐ横）にいつの間にか姉貴が立っていて、その姉貴はまるで野球の投手が投球を終えた後のようなやや前傾姿勢な格好をしている。うつむき加減のその格好からその表情は確認できないが、体全体からかもし出されている殺気により描かれた不動明王像が、なにか姉貴の背中あたりでゆらゆら揺れているような気がしたが、おそらく錯覚だろう。そして、姉貴の立っている延長線上はるか20メートル先の道端に無残な変死体（生死不明。とりあえず、かろうじてなんかピクピク痙攣してんな）が転がっていた。

俺は今度はイフリートの方へ目を向け、トレンチコートを脱ぎ捨てているオツサンの姿を見て、すべてを理解した。

1 俺と努が無駄話してる。

2 さっさとことを済ませたいイフリートが勝手に台本どおり行

動。

- 3 姉貴のスイッチオン。
- 4 なぜか真っ先に努撃退。

注・姉貴は男の裸を見ると自動的にスイッチが入ります。しかも、その場合はバーサーカーモードで、手に負えません。視界に入った男すべてをデリートします。

「……俺、なんか悪いことしたか？」

ふんどし一丁のイフリートが、なんか気まずそうに俺に声をかけてきた。俺はとりあえず「いや、あんたは何も悪くない」とだけ言っておいてやった。姉貴が真っ先に努をデリートしたことについてはなにか作為のにおいをプンプン感じるが、とりあえず、そのおかげで俺は助かったので、気づかないふりをしておこう。ちなみに、天使の奴は今、努の無残な姿をアップで撮りにいきました。助けようって気、まったくありません。

「コオオオオオオ……」

とか言ってるうちに、姉貴がゆっくりと息を吐き出しながら、前傾姿勢から、姿勢を正した。そして、うつむき加減に突っ立ちながら、前髪の間から覗く不気味に光る瞳が、ゆっくりと俺を捉えた。ターゲットロックってか？

「……小僧」

動けばその瞬間殺されるのは分かっていたので、動けないでいる俺に、横からイフリートがそっと声をかけてきた。

「え？」

「逃げる。俺が時間をかせいでやる」

「お、おっさん……！」

「心配するな。お前の姉を消滅させたりはせん。そのかわり……」

神妙な顔をしつつ、イフリートは俺に言った。

「今度、美沙さんを俺に紹介して」

ゴウオオオ！

突然風を切るものすごい音が俺の目の前を横切ったかと思うと、次の瞬間には、イフリートが無残に壁に叩きつけられていた。見ると、姉貴がうつむいたまま無言でイフリートに上段蹴りをかましたようで、姉貴は振り上げられたしなやかに伸びた足を、ゆっくりと下ろしているところだった。

「……」

これはつまり……ノーということか？

「ワ……ワ……ワイルドさに……惚れた……」

そう言い残し、イフリートはこときれた。

「いや、時間かせげよ、お前」

まあ、なんか天使に意味もなく戒めのふんどしのスイッチを入れられ、股間を押さえながら地面をのた打ち回るハメになっていたので、そつとしておいてやるう。もやは人の心配をしている余裕こっちにはないしな。

「コオオオオオオ……」

いや、怖い、怖い、怖い。ターゲットロックされました。ちなみに天使はイフリートののた打ち回る様をアップで撮影してます。お前もう、完璧再現V作るつもりねーな？

しかし、俺も姉貴とはもう16年の付き合いだ。つまり、今置かれていたような窮地など幾度となく経験してきているというわけだ。まあ、その大方は始まり5秒で目の前が真っ暗になり、気づくと病院のベッドの上というパターンなのだが、とりあえず、バーサーカーモードの姉貴を元に戻す二つの術は開拓している。もっとも、姉貴の第一撃を何とかしないと、俺も変死体の仲間入りだ。絶対ごめんだ。

グオアア！

とか言ってるうちに、まるで漫画の効果音のようなありえない音を撒き散らしたかと思うと、突如として姉貴の姿が俺の視界から消えうせた。つーか、完璧人間の反射速度の限界超えてるな。どうかわせってんだよ。と、思っていると「いぎゃあああああああ！」と絶叫しながら地面をのた打ち回っていたイフリートが俺の前を駆け回り、それにつまづいた姉貴の一撃はうまい具合に俺からそれ、背後の壁を叩き壊した。

その隙をついて、俺はその場から逃げ出した。背後でイフリート

の断末魔の悲鳴が聞こえたような気がしたが、さりげなく無視をして俺は全力疾走した。

こんなところで死んでたまるか。

第14話「うまい話には充分注意しよう」

只今、俺は鬼ごっここの真っ最中です。鬼はバーサーカー、捕まればデッドエンド必至な、ごっこなどという子供の遊びのはんちゅうを明らかに超越した追いかけてことです。うん。鬼ごっこにしろ、追いかけてここにしろ、単語から恐ろしいほどこの緊迫した状況が伝わりづらいな。まあ、いいか。

全力疾走しつつチラッと背後を伺うと、20メートルほど離れた場所から、姉貴がうつむき加減のまま、器用に前髪で顔を隠したまま俺を追ってます。すげえ。なんか貞みてえ。子が普通に走ってるよ。そこら辺のホラー映画よりよっぽど迫力あんな。天使もそう思ってたか、横から姉貴の姿アップで撮ってます。って、見たくなえ。あれをアップで見たくねえ。つか、お前後で覚えてるよ、このクサレ天使が。

それにしても、100メートル11秒フラットという俺の自慢の脚をもつてしても、逃げ切れねえとはさすが姉貴。あのバーサーカーを実の姉とは思いたくないが、さすが、日ごろ空手の修練に日々明け暮れているだけのことはある。徐々に差が埋まってきたよ。なんてったって、向こうは疲労を感じねえみたいだしな。トッブスピードのまま、一向にスピード衰えねーよ。ヤバイな、こりゃ。

「うわあああー！」

チユドーン！

「ぎえええええー！」

チユドーン！

ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ。背後に不動明王像てんぎょうをかもし出したバーサーカーにより、無関係の道行く方々（男のみ）が次々に血祭りに上げられてるよ。走る貞を見て、無条件で逃げ出しながらも、結局は追いつかれてデリートされてるよ。ちなみに、しぶとく3人ほど俺の少し後ろについて逃げてたけど、たった今力尽きてデリートされました。本当にすいません。それで、お前はそんな方々の末路をアップで撮りに行くな、ドグサレ天使。

ズオオオオオオ……。

それで、とうとう、背中になにやらむずがゆいような、生暖かいなにかが這うような感覚を感じ振り返ると、すぐ背後まで姉貴が迫ってきていた。なんか、俺の背中へ手を伸ばして「コオオオオオ……」とか言ってます。地獄行きまで残り10センチです。

「ヒロ君、見て見て、後ろ。後ろ。ほら、背後霊に呪われてるよ？」

よし。無事生きて帰れたら、真っ先にこいつを殴ろう。って、終始よくついてきてんなと思ったら、お前その自転車どうした？ どころからパクってきた？

「ねえ、こっち向いて、ヒロ君。その恐怖と疲労の入り混じった必死なマヌケ面をこっちに向けて」

ビデオカメラを俺に向けつつそう言ってくる天使。くそ。睨んでやりてえけど、これじゃ、睨むに睨めねえ……。つーか、そんな余裕ねーけど。

ガシッ。

って、え？ ガシ？

嫌な予感がして振り返ると、はい。姉貴がしっかりと俺のシャツの襟首をつかんでました。

「ノオオオオオオオ！」

俺は反射的に着ていたシャツを脱ぎ捨て、振り向きざまそれを姉貴の顔にかぶせてやった。それは自分でも驚くほどの無意識的行為（防衛本能）だったが、そのおかげで視界をさえぎられた姉貴の動きが止まった。その隙にきつい一発をくれてやることもできたが、いつもの優しい姉貴の顔が俺の脳裏をよぎり、俺は思いとどまった。かわりに、天使の頭をはたいてやった。

「いったあー！　なんで、叩くのヒロ君！」

とりあえず、何も言わずもう一発入れてやったところで、背後からただならぬ殺気を感じたので、俺は振り返らず、すみやかにさかさず逃げ出した。天使の奴には、今晚のおかずにたっぷり一味唐辛子を仕込んでやるか。確か、前に辛いのが苦手とか言ってた気がするし、得意な方でも絶叫する致死量を仕込んでやるつう。

しかし、何とか地獄から一度抜け出したとはいえ、状況にまったく変わりはない。いや、さらに悪化したといってもいいだろう。だって、俺今上半身裸で外走つてんだもん。上半身裸で全力疾走してんだもん。上半身裸で……。うう、周りの視線が痛い。

そこで、天使の奴は嬉々として俺の裸撮ってるし……。こりゃも

う、一刻の猶予もねえな。もう、すぐ背後まで姉貴迫ってきてるし（天然肌センサーで感知。つーか、怖くて振り返れません）、俺が上半身裸になってから、明らかに姉貴の殺気がレベルアップしてるし。早いとこ姉貴を元に戻さねーと……つってもな。

さて、ここでバーサーカーモードの姉貴を元に戻す二つの方法を挙げてみよう

1 姉貴の視界に動いてる男の姿を一人たりとも入れない（この方法をとつたら、俺自身も死ななきゃならないので却下）。ちなみに、死んだふりとかしても無駄です。以前、知らないおっさん（何の罪もない）がそれを試みてましたが、あえなくデリートされてました。

2 小動物（かわいい系に限る）に触れると、時々正気を取り戻す。実はファンシーグッズに目のない姉貴は、無類の動物好き（かわいい系のみ）であり、以前、偶然通りがかった、子犬連れのおっさんがそれで命拾いしたケースがあった。もちろん、100パー成功するとは限らないが、現状で使えそうなのはこの方法しかない。

ってわけなのだが、こんなときにうまい具合にその辺をペット連れの方が歩いてるなんてうまい話が……と思っていたら、なんと前方に見えるは子犬を連れた女の子。うまい。うますぎる。逆に、手を出したくない。

「コオオオオオオオオ……！」

って、いつてる場合じゃないな。うん。しかし、どうする？ この状況で、うまく他人の連れてるペット（見た限り子犬らしいな）を快く貸してもらえないように、あくまで、相手をおびえさせないようにソフトに、それでいて、この状況の顛末を分かりやすく簡潔に

それでいて、連れてくる子犬の必要性を事細かに説明しつつ、その前に、この格好について誤解のないようにまずは説明をしなければならぬ……！

よし。推定15、6歳の眼鏡をかけた、おさげ髪の似合う真面目そうな女の子がこっちに気づいた。今だ！ この状況で 以下略。

「おいしいいいい！」

って、あれ？ なに叫んでるの？ 違う違う、スマイルスマイル。って、いい加減壊れてきてんな、俺も。とりあえず、もう笑顔でこまかそう。スマイル。スマイル。

「そのワン公、こっちよこせ、ゴラアアアアア！」

スマイル。スマイル。

本能が理性を押しやって、しかしながら、ささやかに残った理性でスマイルだけでも何とか作りこんだ俺だったが、台詞と表情のアンバランスさは逆に女の子に無駄に恐怖を植え込んでしまったらしい。女の子は悲鳴を上げて、逃げ っ て、あれ？ 悲鳴は？ つか、なんでその場から逃げ出さないの君？

「いやあああ！ この変態いいい！」

すげえ！ 逃げるところか、立ち向かってきた！

見た目真面目そうで、気の弱そうな女の子は、その見た目とは裏腹に、子犬を胸に抱えこっちに向かってまっすぐ突進してきた。い

や、マジすげえ。貞 に呪われた変態（もやは吹っ切れたな）に向かつて突っ込んでくるなんて、もう、なんつーか、すげえとしか言いようがないです。って、よく見ると女の子の胸に抱かれた子犬なんだけど……。

「なんだよ、その奇跡的に不細工な子犬はああああ！」

「な、なんですってえ！」

注・うまい話には充分注意しましょう。

「って、邪魔！ どけどけ、ぶつかる！ いらねーから！ その不細工な子犬却下だから！」

「な！ まだ言うかこのお！ こうなったら……！ 今よ、チイちゃん！」

「チイちゃん！？」

女の子はなにを思ったか胸に抱いた子犬チイちゃんの前足二本の脇をがっしり持って、そいつを頭の上に掲げた。すると、あらわになった子犬の大事な部分からゴールデンシャワーが降り注ぎ、それは放物線を描き見事俺の顔面に命中した。

「って、ゴラアアアアアアア！」

「あーはっはっは。じゃあねー」

女の子は俺とすれ違つと、高笑いしながら走って行ってしまった。ちくしょう。くせえ。べたべたする。つーか、アイツ自分のペット

になに仕込んでんだ。

ガシッ。

って、え？ ガシ？

聞き覚えのある効果音に再び振り返ると、はい。姉貴が俺のズボンのウエスト部分つかんでました。

「ってなんでわざわざそこつかむんだよ！」

やばい。ついツッコんだら、子にすっげえ睨まれた。ハンパなくこええ。つーか、あんた俺を素っ裸にしてやるうとか思ってるわけじゃねーよな？

うん。どうやら考え過ぎだったみたいだ。貞 は俺をデリートする事しか頭にないらしく、空いた方の拳を握り込んで、なんかそこに殺気を凝縮させ始めた。見えないはずの殺気がどす黒くなって拳の周りに収束してんのが見えてるのは気のせいだよな？

「ねえねえ、ヒロ君。素っ裸になって正真正銘の変態となって生きながらえるか、潔く人として死ぬかどっちにする？」

「そんでお前は究極の二択をビデオカメラ片手に振ってくるな。つか、助ける。助けて。お願いします、助けてください。」

「あ、ちゃんとこっち向いて答えてね」

その気ナツシングってか。お前、もう天界に箱詰めして送り返してやるからな。覚悟しとけよ、ドグサレ。

「コオオオオオ……死ね」

気のせいか、今背後から死ねって聞こえなかった？

「ねえ、どっち」

「どっちもいやだあああああ！」

果たして俺の運命は！？
次回に続く。って、なんかこの振り前にもあったな……。

第15話「つーか、お前そっちの方がキャラ自然じゃねえか？」

ドスン！ バタン！ ドタバタドタバタ！ ガスガス！ ゴスリ
ンチョ

「う……」

気がつくとなぜか自分の部屋のベッドの上にいた。気のせいか、姉貴の過去のトラウマの再現V作るとか天使が言い出して、イフリートを見てバーサーカーモードになった姉貴に追い掛け回され、妙な女のペットにゴールデンシャワーをひっかけられたような夢を見ていたような気がするのだが、気のせいだろうか。夢にしては覚えている内容が具体的過ぎるし、上半身裸のままだし、顔からなんか腐った卵のようなにおいがぶんぶん漂ってくるのだが、夢だろうか。うん。きつと、夢だな。とりあえず、シャツ着て、顔洗いにいこう。

ドタン！ バタン！ バタタタタ！ ガシャゴシヨア！ ドド
ドドドド！ ゲエシャモヘア！ ニューン！ ピロピロピーン！
モへ〜

とりあえず、さつきから聞こえてくる、隣の部屋からの怪奇音に無視を決め込んで部屋の前を素通りした。ちなみに、二階の部屋は階段側から、空き部屋、俺の部屋、姉貴の部屋となっている。そして、謎の騒音が聞こえてくるのは、空き部屋からだ。

「だから、上は絶対私だつて言ってるでしょ！？」

「しつこいなあ！ 上は私よ！ 下っ端は下っ端らしく、私の言うこと聞いてなさいよ！」

「な、なんですつてえ！ おのれ……こうなったら実力行使よ！」

「望むところよ！ イフリート召喚！」

「つて、ちよつとお！ こんなところでそんなもん出さないでよ！」

「ぶちのめして、イフリート」

ドスン！ ボカン！ プスプス……。 ドゴーン！ ボフン！

ブスブスブス……。 ノへ〜ン。ダダダッダッダッダ！ 又〜ン

なにやら、聞き覚えのある争い声まで聞こえてきたが、とりあえず俺は一階に降り、洗面所に入った。顔を洗い終わると、リビングからお袋が夕飯を勧めてきたが、食欲がなかったのでいらないうつておいた。いつの間にか、時刻は夜の7時になっていたが、深くは考えず2階に上がる。

「いぎゃあああああああああ！」

響き渡るイフリートの絶叫。つーか、あんた最近そればっかだな、おっさん。俺は軽くイフリートに同情しつつ、いまだに「私が上よ！」とイフリートを完全無視して言い合いをしている天使の声と謎の女の子の声を部屋の外で立ち聞きした。つーか、天使と言い合いしてるの誰だ？ 完全、知らない人間の声だな。つて、もうそれくらいじゃ動揺しない自分がなんか怖いな。

とりあえず、近所迷惑なので黙らせようと部屋のドアを開くと、絶叫しながらイフリートが部屋から転げまわりながら廊下に出てきた。あまりの痛みに自分でも進行方向がコントロールできないらしい

く、うまい具合に階段の方へ転げ進んだイフリートは、あえなく地獄に落ちた。よし。だいぶ静かになったな。

「お。ヒロ君目が覚めたんだ。よかったね」

「隣の部屋でこれだけ騒がれたら、誰でも目を覚ますわ」

俺に声をかけてくる天使に返事を返す。しかし、空き部屋であるはずの部屋の中には、なぜか二段ベッドが置かれ、部屋の中は整理整頓されている。形跡が跡形もなくなっているのは、おそらくこいつらのドタバタのせいだな。お前ら、後でちゃんと後片付けしとけよ。しかし、なぜ空き部屋に二段ベッドが置かれ、その他生活用品が配備されてるんだ？そして、この場にいる見慣れない女の子は一体……？駄目だ。寝起きから、ツッコむポイント満載で頭いてえ。

5分後……。

「つまり、これからこの部屋はお前（天使）が使うことになったと。それで、その子（知らない女の子）もなぜか家に居候することになり、この部屋を使うことになり、その二段ベッドを部屋に持ち込み、どっちが上を使うかでモメていたと。フザケンナバカヤロウ。オレノイナイアイダニカツテニハナシススメヤガツテ。ツーカー、オマエハナニモノダヨ。イソウロウツテナンダコラ、シネ、カス、ボケ、アホンダラ（副音声）」

「ヒロ君？副音声がモロクソ声に出てるよ？」

「……とりあえず、寝起きの俺にも分かるように順を追って説明しろ」

そう言つと、今まで黙っていた謎の女の子が「分かりましたわ」と声を発した。

天使と同じくプラチナ色に輝く瞳。背中辺りまで伸びた髪を後ろで一つにしばったポニーテールも同じくプラチナだ。ここまでヤツ（天使）に類似していると、同じ人種であることは疑いようがないような気もするが、とにかく無視だ。希望は最後まで捨ててはならない。

「ところで、あなたは誰ですか」

俺はそう言つて、荒れ果てた部屋の真ん中あたりに腰を下ろした。謎の女の子は俺に向かい合つて正座すると、「あ、自己紹介が遅れましてごめんあそばせ」となんか鼻につく言葉遣いで微笑を浮かべた。つーか、お前俺のことバカにしてんのか？ とは思ったが口には出さないでおいた。まだ、初対面だしな。

「私は天使のルル・パッソン。気軽にルルとでも呼んでくださいあそばせ」

やっぱ天使か……。つーか、お前俺をバカにしてんのか？

「あはは。絶対パッソンだよね、ヒロ君。パッソン、パッソン、パッソン、パッソン」

んで、天使が茶々入れて、パッソン もとい、ルルが「ちよつとミリー！ あんたは黙つててよ！」とビシツと天使を指差しながら、普通の言葉遣いで怒鳴った。やっぱ、お前俺をバカにしてるってことか？

「こ、ごほん……。お見苦しいところをお見せしてしまい、ごめんあそばせ。私」

とりあえず、腹が立ったので俺はルルの頭を無言ではたいた。つか、お前は童顔で、小柄、おまけにいかにもロリキャラなそのなり（なんかこいつヒラヒラの真っ白なドレス着込んでます）で、お嬢様ぶるな。なにを指摘してんだ、お前は。

「いったあー！ 何で私今叩かれたの！」

「初めから、そうしろ」

「いや、なにが！」

「いや、スマン。とりあえず、その鼻につくお嬢様言葉は止めてくれないか」

「だったら、初めからそう言ってよ！」

「だから、悪かったって」

俺は平謝りしながら、ルルの怒りをてきとくに鎮めた。つか、だんだん自分が横暴な人間になっていつてるような気がするのせいだろうか。まあ、自覚があるうちは大丈夫か。

「と、とりあえず、この言葉遣いを変える気はございませんことよ。これは、私のポリシーですの」

「左様でございますあそばせ」

「ちょっと！ 私のことバカにしてんのあんた！」

「いや、敬意を表しただけだが」

「うそつけ！」

しかし、コイツ今自分で自分のポリシー全否定したな。とりあえず、なんか面白いから好きにさせとくか。むかついたら殴ればすむだけの話だしな。

ルルは「まったく、だからミリーなんかのお目付けなんていやだったのよ」とか何とかぶつぶつ小声で文句言いながらも、結局は気を取り直して俺に向き直った。

「ねえねえ、ヒロ君。ここだけの話、パッソンって小さい頃に少女漫画に出てきたバカみたいなお姫様に憧れて、こんな出来損ないのアホ姫みたいな言葉遣いするようになったんだよ。プツ。笑えるでしょ？」

確かに笑えるな。

「ちょっと、ミリー！ あんた、余計なこと言わないでよ！ ってか、パッソン言うな！」

「どうして、パッソンはパッソンなの。そつれは、パッソンがアツホだから」

「きいいいいい！ おのれ、ミリー！」

「いや、お前早く状況説明しろよ」

天使を追いかけ回しながら、天使に足を引つ掛けられ見事にずっこけたパツソ　ルルに俺は言った。つーか、天使がパツソソソパツソソ言うからこっちまでうつちまったな。いっそもう、パツソソでいいか。

「駄目えー！」

「だったら、さっさと説明しろ」

もやは、ナレーションにリアクションされても何も感じなくなってきたな。

よほど、パツソソと呼ばれることが嫌らしく、パツ　ルルは天使を追いかけ回すのをやめ、再び俺に向かい合い正座した。なんか、コイツの扱い方が分かってきたな。

「じゃあ、パツソ　ルル。説明してくれ」

「あんた、さつきから絶対わざとやってんでしょー！」

「そんなことないよ、パツ　ルル」

「あんた、ミリーよりたち悪いわよー！」

「左様でございませあそばせ」

「てめえええええー！」

おお。すげえ、キレた。つーか、お前そっちの方がキャラ自然じ

やねえか？

「ほっとけ！」

「あはは。やるね、ヒロ君」

満足げに親指を立ててから、天使は俺の後ろでわけの分からん鼻歌（なんか、パソパソ言ってる）を歌いだした。そんで、もう怒鳴る気力も失くし、パツソンは床に両手をつけて、なんか、ズーン……ってなってる。もしかして、こいつらって元いじめっ子といじめられっ子なのでは？ いや、現在進行形か？ つーか、少しやりすぎたか。

俺は反省しつつ、パツソンに優しく声をかけた。

「悪かったな。元気出せ、パツソン」

「なんで定着してんのよ……。ってか、もう、それでいいよ……」
「なんか、悪いことしたな……。」

第16話「いや、なんとなくこうなるような気はしてたから」

とりあえず、天使がいると話がまったく先に進まず、パッソンが憐れに思えて仕方なかったので、天使を下のリビングにいるお袋に任せ、俺は再びパッソンと部屋の中央で向かい合って座った。

「こほん……。では、私が状況説明をして差し上げますわ」

「ああ、よろしく頼む」

どうやら、パッソンは何か立ち直ったようだ。しかし、呼び名では折れても、ポリシーは曲げないか。思ったより、根性あるなコイツ。

「それではまず、私があなたの家に不本意ながらも居候して差し上げますのは」

俺は何も言わずパッソンの頭を引っぱりたい。

「いったあ！ また、なにすんのよ!」

「いや、ムカついたから」

「当たり前前みたいに言うな！ ってか、あんだ、ちょっとおかしいんじゃないの!？」

お前に言われたくないわ、と思いつつも、これ以上話の腰を折るわけにはいかなかったので、俺は素直に謝ることにした。

「どうもごめんあそばせ」

「楽しい？ 私をからかうのがそんなに楽しい？」

うん。すつげえ、楽しい。しかし、お前泣くほど悔しいのか？

幼い頃それでいじめられた悲しい過去でも思い出したか（推測）？

「じゃあ、今度こそこの状況を説明してくれ、ルル」

俺は泣きながら恨めしそうに睨んでくるパツソンを無視してその声を出した。なにをもって「じゃあ」なのか不満そうだったが、俺がルルと呼んだことでパツソンは納得したらしい。泣き止んで、機嫌も直ったようだ。ほんと、コイツ扱いやすいな。

「おほん。では分かりやすいように、あなたの知りたいことを質問してくださいませんか？ 私、あなたの疑問にすべて答えて差し上げますわ」

危うくパツソンの頭を引っぱたきそうになるのを何とかこらえて、俺は言った。

「分かった。じゃあ、お前は どうして俺ん家に居候するんだ？」

「私だって好きでなさるわけではありませんわよ。でも、ミリーのお父様にミリーの お目付け役頼まれました、私、しぶしぶこちらへ居候することになりましたの。あのバカいくら帰れって言ってもお聞きになりませんので、仕方ありませんわ」

「いや、そんなに嫌なら断りゃいいじゃねーか。アイツ、ただの親子喧嘩で家出してきただけだろ？」

「とんでもないですよ。あのバカのお父様は天使の中でも最高位のセラフイムなんですよ。セラフイムの称号はすなわち天界では1、2を争うほどの権力者であるということ。一天使である私ごときがその方のおっしやることを断れるわけがありませんわ」

「ふーん。何気にアイツってお嬢様なんだな」

俺の言葉に、パツソンは分かりやすく、悔しそうに歯軋りした。なんか面白くてつい「ドンマイ」って言ったら、すげえ、睨まれた。

「それで!?! もう質問はございませんこと!?!」

完璧八つ当たりに来てるパツソンが、そう言って声を荒げた。しかし、俺が知りたいのはむしろここから先だ。

「そんなわけあるか、ボケ。本題はむしろここからなんだよ」

「いや、少しは下手に出てくださっても……」

パツソンの主張を無視して、俺は言った。

「とりあえず、お前はいつ俺んちに来たんだ?」

「あら。覚えていらっしやいませんか?」

「見りゃ分かんذار、ボケ」

「そんな、横暴な……」

パツソンの主張を無視して、俺は言った。

「とりあえず、気がついたらベッドの上だったんだよ。さっきまで、なんか、上半身裸で姉貴に追いかけて回される変な夢を見てたんだが」

「あら。それは夢じゃございませんことよ」

……やっぱりか。俺はなんとなくパツソンの頭を引っばたいておいた。三回ぐらい。

「な、なにすんのよ!」

「いや、夢であつて欲しかったから」

「わけ分かんないこと言うな!」

「えーと。しかし、それならなんで俺は無傷なんだ？ 俺の記憶が確かなら記憶が途切れる直前に見た光景はもう殺される直前のものだったような気がするんだが」

「いや、謝罪は！ なにグダグダのまま話進めてんの!」

パツソンがビシツと俺を指差してそう叫んだ。つーか、人を指差すなよお前。とにかく、面倒くさいから俺は適当に謝っておいた。

「どつてもごめんあそばせ」

「おしいい!」

「しかし、ルル。どうして俺は無傷なんだ？」

「え？ あ……そ、それはですね」

ほんと、コイツ扱いやす。

「ちょうど、私が天界からこちらへ来た時に、なんか怖い生き物に上半身裸で追いかけてまわされてる変態をお見かけしましたの。よく見ると、その変態と一緒にミリーがいて、話そうにも「いいとこなんだから邪魔しないで」とかほざきやがるもんですから、とりあえず話を進めるためにも、なにが嬉しくて上半身裸で外を走ってるのかさっぱり理解できないド変態をどうにかしないとイケないと思いましたの」

「そうか。そんなに殴られたいか」

「……そんなわけで、怖い生き物に追いかけてるあなたを救出しましたの」

「いや、そこだよ。そこんとこ詳しく話せよ。俺が知りたいのは、あの状況でどうやって俺を助けられたんだってことなんだよ」

いや、そんなことよりまず助けてもらったってとこに注目しろよ。的な目で俺を見てくるパッソンだったが「いや、なに？」的な視線をよこすと、なんかズーン、ってなった。そして、そのまま口を開いた。

「……これを使いましたの」

そう言ってパッソンはおもむろにドレスの胸元に手を突っ込んだ。

いや、なにやってんだお前。ちなみに、パッソンは幼児体型で胸もまっ平らだから、突っ込んでも引つかかるものは何も無い。しかし、胸から手を戻したパッソンの手には何かが握られていた。

「なんだ、それ」

俺はパッソンの手のひらに乗った、小さな飴玉程度の大きさの木の実のようなモノを見て言った。見た目は完璧なにかの木の実のようで、触ってみると見た目どおりなんかざらざらした。

「これは、ピッツエナグルエラレルモナキシーノ樹から取れるアリエヘングライマツズイーの実、ですわ」

「お前、そんなに殴りたいのか？」

「いや、からかってないから！ 私だって、馬鹿みたいだと思っけど、それが正式名称なんだから仕方ないでしょ！？」

必死こいて抗議してくるパッソンがなんか可哀そうだったので、俺はツツコまないでおいてやることにした。

「そうか。それで、その何とかの樹から取れる、名前だけで、もう、どんなもんか分かるそのふざけた名称のその実で、どうやって俺を助けたんだ？」

「このアリエヘングライマツズイーの実は、ありえないほどマジイ実ですの。天界では主に、医療用の最終手段として用いられていますわ」

「医療用の最終手段？」

「原因不明の昏睡状態に陥った方や、植物状態で意識を取り戻さない方もこの実を一つ口にすれば、そのあまりのマズさに目を覚ましてしまうという」

「いや、無茶すんな」

「つーか、そんなことがまかり通るのか、天界ってところは。」

「ほほほほ。まあ、それは冗談ですけど、この実」

冗談自体よりも、笑い方がムカついたので俺はパッソンの腕をむんずとつかんで、そのまま部屋の壁めがけて投げ飛ばした。パッソンは「ぎええ！」と笑える声を上げて壁に激突したが、無傷ですんだらしい。見た目より頑丈らしいな。

「ちょっとおお！　なんてことすんのよあんだあ！」

打ち付けた後頭部をさすりながら、パッソンが怒鳴ってきた。

「笑い方が不快だった」

「なに、そのやる気のない読書感想文みたいな感想！　つーか、それぐらい理性で何とかしろ！」

「そうだな。気をつけるよ」

「え？　あ……分かれればよろしいですけど」

てつきり反論されると思っていたのだろう。パッソンは素直に自

分の主張を認められて、拍子抜けしたようにそう言った。よし。散々繰り返し返されたもんだから、コイツ、理不尽な扱いに順応したな。慣れとは恐ろしいものだ。

「それで、お前はその実でどうやってバーサーカーモードの姉貴から俺を助けたんだ？」

「ああ。それは、この実をあなたのお姉さまの口の中に押し込みました。見たところ、何らかの理由でお姉さまは正気を失ってらっしゃるようだったので、もしかしたらと思いましたが。もし、あれが無意識の状態だとしたら、この実を食べれば正気に戻るかもしれないでしょう？」

「なるほど。それで、姉貴は正気を取り戻したと？」

「ええ」

ん？ ちょっと待て？

「一つ素朴な疑問があるんだが、いいか？」

「なんです？」

「お前に助けられた俺は、どうして気を失ってたんだ？」

「え？ あー……。そ、それは、その……」

パッソンは目を泳がせながら、俺から目を逸らした。なんて分かりやすい奴だ。俺は、キョドっているパッソンの肩に手を置いて、言っちゃった。

「正直に言ってみろよ。怒ったりしないから」

「ほ、本当に怒りませんか?」

「ああ。むしろ感謝してるよ。お前がいなきゃ、俺死んでただぜ?」

「そ、そうですね。実は、お姉さまを正気に戻した後、ミリーとちよつとケンカしてしまいました」

「そのゴタゴタの最中に、お前が天使の口めがけて投げ込んだアリエヘングライマツズイーの実が、誤って俺の口の中に入り込んでしまったというわけだな?」

「……そ、その通りですわ」

エへ、とお茶目に笑ってみせるパツソンに優しく微笑み返してやり、俺はパツソンを一本背負いして、地面にたたきつけた。

「グハア!」と下品な声を上げ、ピクピク痙攣しながらも、数秒後には起き上がって文句を言ってくるパツソン。ほんと、お前丈夫だな。

とりあえず「怒らないって言ったのに!」と怒鳴ってくるパツソンに「ああ。怒ってねえよ」と返し「じゃあ、何で一本背負いするの!?」とこれまた怒鳴ってくるパツソンに「お茶目な笑い方が不快だった」と言っちゃった。

「まあ、落ち着けよ。とりあえず、お前のおかげでばやけてた一連

の記憶も全部思い出せたからさ」

そう。おそらく、記憶が一部抜け落ちていたのはアリエヘングライマツズイーの実を食ったための副作用だろう。意識を失った人間を強制的に目覚めさせるほどのマズさは、もちろん正常な人間にしてみれば、失神してしまうほどのマズさというわけだ。

まだしつこくぎゃあぎゃあ文句垂れてくるパツソンに、もう一度一本背負いを食らわすと、大人しくなった。どうやらこいつ、まだ理不尽な状況に順応しきってないらしい。って、俺ってもしかしてひどい人間なのだろうか？ まあ、その後「すまん。ちょっとやりすぎた」と謝ったら、機嫌直ったからいいか。

「ところで、パツソン。そのアリエヘングライマツズイーの実なんだけど、一つ俺に譲ってくれないか？」

「え？ でも、これは貴重なものですし、天界のモノをむやみに人間のあなたに」

しかし、その用途をパツソンに説明すると、パツソンは快くそれを俺に譲ってくれた。それで、お袋が「ヒロ君」。バレちゃん、もう我慢できないっていうから夕飯出しちゃうわよ。ヒロ君今日はもう食べないの〜」と言って俺の部屋に入ってきたので、俺は「いや、やっぱ、食うよ」と言って下に下りた。もちろん、パツソンも一緒に。

その後、俺が天使を懲らしめるため、アリエヘングライマツズイーの実を天使の食事に盛ったことは言うまでもないだろう。そして、あらゆる手違いが重なり、パツソンがとぼっちを受け失神するハメになったことも言うまでもない。人生、生まれつきの勝者と敗

者はいるものだ。

「ちよっとお！ なによそのオチイイ！」

「いや、なんとなくこうなるような気はしてたから」

ちなみに、天界には「記憶置換装置」という人間の記憶を部分的にコントロールできる便利な機械があるらしい。その使用はお偉いさんの許可が要るらしいのだが、パッソンをこつちへよこすとき、天使の親父さんがその使用許可をパッソンに出し（天使がこつちで他人に迷惑をかけることは百も承知らしい）、一連のドタバタは関係者だけ（俺、天使、パッソン）の知るところとなった。

ありがとう、親父さん。俺は、天使の親父に心から感謝した。でも、パッソンは正直いらぬ。そして、あれほど天使のやつを天界に箱詰めして送り返してやると思っていたのに、結局そうはしない俺って……。なんか、アリエヘングライマツズイーの実のせいで、一連の出来事に現実感がわかねんだよな。まあ、誰も俺の羞恥姿覚えてねえからいいか。でも、パッソンはいらぬ。

「ちよっとお！ 誰のおかげで、あんたの尊厳守れたと思ってんの！」

「ありがとう、天使の親父さん」

パッソンは静かになった。まあ、そのうちいいことあるぞ。

第17話「つーか俺のせいでもねえだろ」

パッソンが家に居候しだしてから、一週間が経った。その日も、俺が学校から帰宅すると、俺の隣の部屋で妙な怪奇音とともに天使とパッソンの争い声が響いていた。日常茶飯事というやつだ。まあ、三日たて続けにやられたときは、さすがにムカついて有無を言わずパッソンをひっぱたき、事を沈めたが、その後も幾度となくケンを繰り返すので、もう放置しておくことにした。そもそも、あの二人を同じ部屋に押し込めようつてのに無理がある。しかし、居候ごときに別々の部屋を用意までしてやる義理はない。つーか、パッソンに個室は贅沢だ。

とにかく、俺は騒がしい部屋の前を素通りして自室に入った。

ドガガガガ！ ドスン！ バタン！ ドンガラガシャア！ ドン
ドンドンドンドンドンドン！ テッテテーン

どうでもいいが、あいつらどうやってこんな効果音出してんだ？

「だから、こっからここは私の領地なの！」

「ふざけんじやないわよ！ それじゃ私身動き取れないじゃないの
！」

「そーだよ。なんか問題ある？」

「大有りよ！ 大体あんたは」

「パッソパッソパッソパッソパッソパッソ」

「きいいいいいい！ おのれ、ミリー！」

ドタバタドタバタ！ ズデン！ ドンドン！ ガラガラガン！
ドドドン！ スッテンコロリン

「食らえ！ アリエヘングライマツズイーの実乱れ投げ！」

「パソソ！ パソパソパソパソソパソソウー（パツソン語・笑）」

「ちくしょおおお！」

小学生レベルのケンカだな、こりや。しかし、いつもどおりやはり天使のほうが優勢のようだ。つてか、毎度いいように遊ばれてんな、パツソンの奴。しかし、その分俺への負担が減り、これは思わぬ収穫だった。ストレス溜まったときもあいつぶん投げればスカツとするし……いかん。これじゃまるつきり、思いやりのない人間だ。しかし、あれだけイジメられ要素を兼ね備えた人間も他にいねえしな。まあ、利用価値はあるんだから、時には助けてやるか。つてわけて俺は部屋を出て隣の部屋へ向かった。

ドタタタタ！ スコンスココン！ ズゲン！ モヘアゝ

「おい、お前ら」

「秘奥義！ A・M Land in hell（アリエヘングライ・マツズイーの実で地獄に落ちろ）」

ドアを開けた途端、パツソンが四方八方無差別に投げまくったA・

M（アリエヘングライマツズイーの実ね）が図ったように俺の口に入り、俺の意識はそこで途切れた。

30分後。

目を覚ますと、俺は自室のベッドに寝かされていた。そこで、横でなんか天使とパッソンがケンカしてたので、とりあえず俺は枕でパッソンの頭を殴り、返す刀で、一本背負いして地面にたたきつけた。

「だ、だって、ミリーが……」

五分後、しゅんとして俺の前に正座するパッソン。俺はベッドの上に座ってパッソンを見下ろしながら、小さくため息をついた。ちなみに、天使は勝手に本棚から俺の漫画とって、俺の背後で勝手にベッドに寝っ転がって漫画読んでる。

「んで、今回のケンカの原因は？」

「その……ちょっと、部屋でのお互いの領地を取り合いました……」

「いや、居候のお前らにそんなものは最初から存在しねえ」

俺がそう言うと、天使はあっけらかんと「あっはは。だよなー」と笑い、パッソンは上目遣いに天使をにらみながらぎりぎりと齒軋りした。んで、ドレスの胸元に手を突っ込み、A・M（アリエヘングライマツズイーの実ね）を取り出そうとする素振りを見せたので、とりあえず、頭ひっぱたいとした。

「つーか、お前、そのドレスの中どうなってんだよ」

外見上、胸ぺったんこのくせに、ドレスの内側からはありえないほどA・Mが出てくる。どう見てもドレスの内側に何かを隠しているとは思えない、その物理法則を無視した秘密がただ単純に気になっただけだったのだが、パッソンは俺の質問にポツと顔を赤らめて、恥ずかしそうにうつむいた。

「ドレスの中って……。そんなこと……」

とりあえず、天使が読んでた漫画を取り上げて、その角でパッソンの額を思いつきり打ち抜いた。

「そつちじゃないわ。A・Mをどうやってそんな大量にその中に隠してんだって事だよ」

両手で額を押さえながら、ひたすら床を転げまわるパッソン。世間では、本当に痛いときは声も出せないとよくいうが、どうやらそれは本当らしい。ちなみに天使はパッソンを見て、爆笑している。つーか、お前この光景イフリートで見慣れてるだろ。

しばらく口をパクパクさせながら地面をのた打ち回った後、ようやくパッソンは口を開いた。つーか、怒鳴ってきた。

「私が恥らっちゃ悪いのか!？」

「悪い」

一言言い切ると、パッソンは大人しくなった。だって、そうなるとまるで俺がロリコンみたいじゃん。つーか、ぺったんこのくせに恥らつな。

「パッソンが来てから、ツッコみとして一皮むけたねヒロ君。よかった、よかった」

「よくない！　ってか、この扱いをツッコみの一言で済ますな！」

笑いながら声を出す天使に、ビシッと指を指して怒鳴るパッソン。お前、それ間接的に俺に抗議してるだろ。

「そんなことより、パッソン。大量のA・Mドレスの中にどうやって仕込んでんだ？」

「そんなこと……私の扱いについてがそんなこと……」

なんか、パッソンはうつむいてぶつぶつ独り言言い出した。相当落ち込んでいるようだ。しかし、パッソンの代わりに天使が説明してくれたので問題は無い。

「ああ。それってドレスに仕掛けがあるわけじゃないよ？」

「？　どういうことだ？」

「こづいづこと」

そう言うのと天使はおもむろに虚空に手をかざした。すると、いきなり天使の手の先の空間がグニヤリといった感じで歪んだかと思うと、今度はグニヤニヤニヤニヤといった感じで空間に真っ黒な穴があいた。物理法則を無視した現象なので俺もどう解説したらいいかわく分らんけど、とにかくグニヤグニヤした感じだ。それで、天使はその真っ黒な穴というか、空洞というか、とにかく直径15セ

ンチほどのその中に手を突っ込んだ。なんかズブズブズブ〜て音がして、天使の手が飲み込まれていく。気色悪いことこの上ない。

「で、そのなぞの気色悪い穴は何なんだ？」

「お。だんだん、驚かなくなってきたねヒロ君」

「まあな」

それがいいことかどうかは、複雑だが。

「で？ それは？」

「これはねー、ゲートっていつて、便利な穴倉っていうか、物置っていうか、あったらいいな的なアイテムっていうか、四次元ポケットっていうか」

つまり、詳しい構造は本人もよく知らんということか。

「じゃあ、その用途は？」

「どこにいてもあら便利。手をかざすだけでゲートが開き、何でも出し入れ可能です。他人に知られたくないこと、秘密にしておきたいことは全部そこに隠しちゃえ。なお、ただいまキャンペーン中につき、不倫中の旦那様、奥様には50%オフで提供しております。是非、ご家族でお求めください」

商品のうたい文句か。まあ、用途は分かったからいいが、なんつーうたい文句だこれ。家族で訪れて嫁や旦那の目の前で「あ、俺（私）浮気してるから半額にしてね」なんて言えると思ってるのか？

「つーか、一番の被害者子供じゃねーか。笑えねえよ。」

「ね？面白いでしょ？」

「そう言いつつ、天使はゲートを閉じた。」

「確かにある意味面白いが、しゃれにはなっぺねえな？」

「でも、キャンペーンのおかげで大ヒットしたよ？」

「そうか。今、天界という世界が見えたような気がしたよ。」

「家族に隠れてこっそりお求めになっぺる汚い天使たちの姿がな。」

「どうやら、天使というモノは幻想のようにキレイなものではないらしい。まあ、天使と同居してるからいまさらそんな驚きもしいけどな。」

「ところで、じゃあ、なんでパッソンはいちいちドレスの中に手を突っ込んで、さもそこからA・Mを取り出してるように見せてるんだ？」

「あはは。それは、漫画に出てきてたバカ（お姫様）がそうやっていろいろなものドレスの中に仕込んでたからだよ。ツプフ。バカみたいでしょ？」

「……………」

「俺はなぜか悲しくなっぺ、まだぶつぶつ独り言言っぺるパッソンに同情のまなざしを向けた。そんなことしても、お前お嬢様にはなれねえよ、パッソン……………」

しかし、俺の同情も天使の声でさえぎられることとなった。

「そんなことより、ヒロ君」

「そんなこと……私はどうせそんなこと……」

パツソンのつぶやきは聞こえていたが、俺は堂々と無視して天使に返事を返した。

「何だ？」

「そういえば、ここのところすっかり忘れてたけど、今まで一度もヒロ君のお父さんの姿目撃してないけど、どうして？」

いや、ほんと今頃かよ。

「これだけ引っ張るってことは、あれ？ 家族の最終兵器、みたいなノリなの？」

「いや、親父はただの平凡なサラリーマンだ。今まで出張で家空けてただけで、ちよつど今日帰ってくるよ」

ほんと、絶妙なタイミングで切り出してくるな、こいつ。そんで俺の台詞にテンションを上げる天使。なんか、落ち込んだたパツソンも顔を上げて反応した。

「うわあ、楽しみ　ヒロ君のお父さんかあ。一体どんな変態さん？」

「お前……それどついう意味だ」

「ほほほほ。娘が二重人格、息子が暴力ツッコみ不良、妻が幽霊と来れば、それはすさまじい変態」

「やかましいわ、ボケ」

そう言つて、俺はパッソンにツッコみを入れた。

「ちよつ!?! 今、私ぶん投げられたよ! ツッコみの一言で済まさないで!?!」

パッソンの主張を無視して、二時間後。家族と居候二人はリビングに集まり、親父の帰りを待っていた。親父から「今から帰る」と電話があつたらしいので、そろそろ帰ってくる頃だろう。まあ、俺たちがわざわざ下に集まっているのは、ちよつど食事時だから親父が帰ってきてから一緒に食おうということになっただけの話だが、天使とパッソンはなんか、ウズウズしてる様子だ。よっぽど、親父と会つのが楽しみらしい。ちなみに、姉貴は部活(空手部)の練習があり、まだ帰ってきていない。

「ねえねえ、パッソン。ヒロ君パパってどんな人かな」

「それはもう、息子に輪をかけた暴力親父に決まっていますわ。目を合わせただけできつと噛み付いてきますわよ」

「あつはは。んなわけないじゃん。きつと、ヒロ君パパは女装が趣味の、42歳。今年ちよつと水虫ができて落ち込んでるところに上司にガミガミ文句言われて「俺はイボ痔なんじゃ、ボケー!」って逆切れする、中間管理職だよ、きつと」

「ほほほほ。意味不明ですわよ、それ」

リビングのソファで並んで腰を下ろし、親父の話で盛り上がる天使とパッソン。つーか、お前ら普通に仲良くできんなら初めからそうしとけ。

「ふふ、二人とも楽しそうね」

台所に立って（浮いて）夕食の用意をしながら、俺に声をかけてくるお袋。俺はため息をついて、テーブルの前に腰を下ろした。

「ったく、勝手に盛り上がってる。俺はどうなっても知らねーからな」

「まあいいじゃない。二人とも楽しそうなんだもの」

10分後、玄関から「ただいま」と親父の声が響き、天使とパッソンは待つてましたといわんばかりに、リビングを出て玄関へ駆け込んだが。

「おう、広之。ただいま」

「……おかえり」

リビングに入ってきた親父は、俺に気がつくと言をかけた。そして、親父の背後からのそのリビングに入ってくる、天使とパッソン。なんか、非常に戸惑っている様子だ。二人して顔を見合わせて、なんか意味もなく「あはは」「ほほほ」って笑いあっている。

「あー、疲れた。母さん、ビール出してくれ」

「はいはい」

俺の向かいに腰を下ろす親父。そして、テーブルの上に四人分の食事の用意がされていることに気づいたらしい。親父は「あれ？」と言って俺に怪訝な顔を向けた。

「広之。何で食事が四人分も用意してあるんだ？ 美沙はまだ帰ってこないんだろ？ まさか、母さんが食うわけもないし」

「あー……」

言いよどんでる俺の背後にゆっくり近づいてくる、天使とパツン。しかし、親父はまったく二人に目もくれない。ってか、これはもう間違いなくそうだ。

親父に二人の姿は、見えていない。

その事実は、なんか部屋全体の基本温度を2度ほど下げたというか、ヒューと虚しい風が吹いたというか、とにかく、まあドン引きの空気がこの空間を支配した。そこで、天使がゆっくりと俺の背後で声をかけてきた。

「……ヒロ君？」

「うるせえよ。納得しろ」

だから、どうなっても俺は知らないって言ったんだ。つーか、俺

のせいでもねえだろ。

ちなみに、ドン引き空気はこの後しばらく続きましたとぞ。

第18話「許せ、親父……」

「やっぱり、普通だね……」

「やっぱり、普通ですわね……」

朝っぱらから、神妙な顔をして食事の席についている天使とパツソン。二人の真正面には、新聞を広げ今朝の記事に目を通して親父がいる。

普段どおりの朝の風景だ。しかし、何とか親父の「変わった」部分を発掘しようと、二人は昨日からあらゆる努力を試みていた。とりあえず、その詳細をざつと紹介しておくか。

1 親父がテレビを見ようとすると、電源を消してみる。んで、もう一度親父が電源を入れると、すかさず消す。その繰り返し。

2 耳元で「カムサハムニダ！」と怒鳴ってみる。その後「お前はもう死んでいる」とそつと囁く。

3 親父が風呂に入っている隙に、用意していた着替え、バスタオル等すべてを隠し、代わりに姉貴の下着を置いてみる。

4 親父がトイレに行こうとすると、先回りしてトイレにこもり鍵をかけてみる。

5 晩酌のビールにアリエヘングライマツズイーの実を盛ってみる。

6 寝室に侵入し、電灯のスイッチを切ったり入れたりを繰り返してみる。その後、ベッドを揺らしたり、洋服ダンスを開け閉めした

り、あたかもポルターガイスト現象のような行為を延々行う。

これだけでも分かるように、すべての行為は完璧たちの悪いただの嫌がらせだ。他にも多々あるにはあるのだが、説明するのも馬鹿馬鹿しいので省いておく。つーか、二人も後半からはただ単に親父のリアクションを楽しんでいるだけのように見えたのは、俺の気のせいかな？

「なあ、広之」

新聞を広げながらも、記事に集中できない様子の親父が隣に座る俺にそつと声をかけてきた。

「なにか、誰かに見られているような気がするんだけど……気のせいかな？」

「……気のせいじゃねえな」

あんた、さつきからたち悪い二人に見られてるよ、親父。

「……俺、なんか二人に嫌われるようなマズいことしたかな」

「いや、親父に非はまったくない」

ちなみに、昨日のうちに親父は天使二人の存在を認識だけはしていた。お袋のことで心霊関係に免疫があるとはいえ、それとはまったく別物の「意味不明」な生物、しかも姿の見えない未知の生き物からの一方的な声だけの自己紹介に、親父は困惑し狼狽しながらも、快く二人の居候を許可したのだ。ほんと、この親父は人がいいことこの上ない。

「それじゃ、私行つてくるね」

すでに制服に身を包み、身支度も済ませた姉貴が、一人早々に朝食を摂り終え、椅子から腰を上げる。部活の朝練があるため家族の中で一番に家を出て行くのはいつも姉貴だ。それで、リビングから出て行くこうとする姉貴の背中に、親父が慌てながらも控えめに、それでいて極力気を遣うような、端から見えてあまりにも気の毒な様子で姉貴に声をかけた。

「い、いつてらっしゃい、美沙。気をつけてな」

姉貴は親父の声に立ち止まると、すつと振り返って親父に冷たいまなざしを向けた。父親を毛嫌いする難しい年頃の娘、そんな娘にどう接していいか分からない父親。そんな典型的な家族の型にはまることなく、今まで普通に仲のよかった二人だったが、姉貴は何も言わず分かりやすく不機嫌にぶいっと親父から目をそらすと、無言でリビングから出て行ってしまった。

あの姉貴がシカトか……。こりゃ、相当腹立ててるな……。んで、親父のほうを見ると、こっちはこっちで、突然地獄の底に突き落とされました、みたいな顔をして、呆然と固まっていた。

「うーん。美沙ちゃんったら、よっぽどヒロ君パパの女装趣味が許せないんだねー」

「ほほほほ。ミリー。あなたまだ、そんなこと言ってますの？ 昨日、洋服ダンスあさってみましたが、それらしいものは見当たらなかったでしょう？」

「甘いね、パツソン。プロの変態は他人のものをつけたがるものなんだよ。きつとヒロ君パパは美沙ちゃんのを影で愛用してるの。中間管理職の隠ぺい工作とストレスをなめちゃだめだよ」

いや、お前が世の中間管理職の方々のなにを知ってるってんだ。つーか、まあ、確かに親父は中間管理職だし、聞いててなぜか説得力があるように聞こえてしまいが、親父は決してそんな変態ではないことをここではつきりいっところ。

そもそも、親父が姉貴にシカトされたのも、元を辿れば全部こいつらのせいだ。昨日、親父が風呂に入っている間にこいつらが、用意していた親父の着替えと姉貴の下着をすり替えたもんだから、親父がそれを姉貴の部屋に返しにいく羽目になり、話がこじれたというわけだ。完全なとばっちりだな。

「……元気出せよ、親父。姉貴には、また俺からきちんと話しくから」

俺はあんぐりと口を開け、固まったまま動けないでいる親父に声をかけた。おそらく、今の親父に俺の声は届いていないだろう。無理もない。これまで順風満帆に築いてきた娘との仲を、たった一夜にしてずたずたに引き裂かれたのだ。昨日からの一連の出来事を振り返ると、間違いなく親父が誰よりも天使から一番被害を被っている。奇人変人の枠の中に放り込まれた常人の親父に、俺は心から冥福を祈った（死んでねーけど）。

そんで、そんな親父をよそに天使とパツソンはなにやらごしよごしよと内緒話をして、時々笑い合っていた。何か悪巧みをしていることはあからさまだったが、俺も学校に行かねばならないし、ここでむやみにツッコむと、標的が親父から俺に切り替わってしまう恐

れがあつたので、そつとしておくことにした。許せ、親父……。

そして、時刻は8時を回り俺はたち悪い二人を残し家を後にした。真の親父の受難は、ここから始まる。

つてわけで、ヒロ君が学校に行っちゃったので、ここからは私、天使ことミリアリア・バレンタインがナレーションを担当します。よろしくね。あ、ちなみに、パッソンもやりたがってたけど、お嬢様言葉がウザイってことで私が却下しました。つてことで、話に戻るね。

ただいま時刻は、えーと、8時27分。そろそろ、家出ないと遅刻しちゃうわよ〜ってヒロ君ママが言ってるのに、ヒロ君パパったら、まだ固まつたままなんだよね。よっぽど美沙ちゃんに無視されたのがショックなんだね。なんか、落とし物を拾って親切にその人に返そうとしたのはいいけど、なんか声かけるタイミング逃して、結局家までついていっちゃったのはいいけどやっぱり声かけらんなくて、そのままズルズルストーリーカーになっちゃいました。つて顔して固まつて。

「ちよつとミリー！ あんたなに訳分かんないうえに適当な説明してますの！？ いい加減なことしてるとナレーション交替させますわよ！」

なんかパッソンが怒鳴ってるけど、私はさりげなく無視をした（ヒロ君の真似）。

「おいしいいいいい！！ あんな奴の真似するなあ！」

ムツシムシ（私流）。

「そついつごとじゃないのおおお!」

もううるさいなあ。なんか、もううつとおしいから、イフリート呼んで今日一日パツソン部屋に軟禁しよう。

「ってわけでよろしくねイフリート」

「……ウス」

「おのれ、ミリィイー……」

ボタン! (部屋のドアが閉まる音) カチャ! (内鍵かけた音)

さてさて。そうこうしてるうちに、ヒロ君パパは、身支度を終えてまさに家を出ようとしてるところでした。うん。背広着込んでばかり、いい感じに疲れた中年サラリーマンに変身しちゃった。んもう、ここで「変!身!」とか言ってくれば笑えたのに、ヒロ君パパったら、笑いのセンスないんだから。決めポーズはもちろん、カツラとつてハゲ頭を誇らしげになでながらガッツポーズ。そこですかさず決めゼリフ。

「ストレス戦隊! ハゲリーマン!」

ってことなの。

うん。つまりね、私ヒロ君パパの頭絶対カツラだと思っただよ。だって、絶対おかしいでしょ? ヒロ君パパって髪の毛普通にあらんだよ? ヒロ君が言うにはヒロ君パパって今年44歳の中小企業の課長なの。それなのに髪はふさふさで短髪できまつてるし、体型もなんかスリムだし、優しそうな朗らか顔してるから、なんかメガネも似合ってるし、これって絶対おかしいと思うの。

だって、中間管理職だよ？　上司と部下の板挟みだよ？　やけ食いしなきゃやってらんねーんだよ？　いつか上司絞め殺してやるうと思ってるんだよ？　ね？　おかしいよね、絶対。

でも、昨日お風呂上がり髪に髪の毛引つ張ってみただけど、取れなかつたんだよ。私が思うにヒロ君パパには絶対なにか秘密があるんだよ。

ってことで、私今からその秘密暴くためにヒロ君パパの会社についていこうと思うの。そんで中間管理職の生態をきちんと調査して、家族のみんなにも報告してあげようと思うの。そうすればきっと「ためえに生きる価値はねえ！」って叫んじゃいたくなるようなとんでもない秘密が明らかになって、美沙ちゃんだってきつと機嫌直すよ。うん。女装趣味なんてもったいぶるより、実はホモでしたってカミングアウトしちゃえば、美沙ちゃんだって、分かってくれるわけねーじゃん。あっはは。

ってわけで、これから私ヒロ君パパのあとつけちゃいます。調査報告は次回ってことでお楽しみにね　チャンチャン

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6628b/>

奇人変人行進曲！

2010年10月11日02時02分発行